ピースボート「地球一周の船旅」　航海日誌31－60 回

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 31

2024/06/05

憧れの巨大な遺跡列岩を見に行く

船が寄港地に寄る時間は 1 日か 2 日と決まっています。イギリスはロンドンから 40 キロの距離にあるテムズ河口のティルベリー港に接岸して 2 日滞在し、上陸して見物する 10 本のツアーが用意されていました。その中から 1 つだけ選ぶのは相当に迷いますが、1泊 2 日でストーンヘンジ（stone henge）に行くツアーに参加しました。

初日のロンドン観光は、前回書きましたが記録的な大規模デモの規制を受けてほぼバスに缶詰状態。2日目は早朝からバスに乗り込み、ひたすらストーンヘンジに向かって走ります。前日はバスに閉じ込められて終わった反動もあり、広々とした平原と羊たちの群れを飽かずに見ていました。

突然、眼に入ったのは平原の彼方にうごめく一本の線でした。あれは何だろう。アリの行列のように何かに向かってうごめいています。その先端まで追いかけてみると、そこに大きな岩石のようなものが点々と見えます。筆者はあっと心で中で叫びました。ついに来たのです。ストーンヘンジの独特の形が並んでいます。長い間、実際にこの眼で見たいと思い続けてきた憧れの巨大な岩石遺跡です。

長い人の列が巨大遺跡群につながるように尾を引いていました。

シャトルバスで至近距離まで接近して見学

バスは遺跡から遠く離れたセンターに着き、そこからシャトルバスに乗り換えてストーンヘンジまで運ばれていきます。この巨大な岩石遺跡に筆者が注目したのは、少年時代でした。いまから4500年も前に、なぜにしてあのような巨大岩石を人々が組み立てたのか。少年雑誌に特集として写真入りで掲載されていました。その雑誌のことは大人になってもしばらく思い出すことがありました。

構成する何十トンという巨大な岩石は、数十キロ離れた山地から運んできたものです。先史時代に誰が何の目的でこの平原まで運び、組み立てたものなのか。野の原の中に屹立する岩石の構造体を筆者はいま見ようとしています。わくわくするうちに、それが眼前に現れました。

ストーンヘンジ見学は、遠巻きに一周するようにコースが出来ており、歩いてほぼ1時間で終了します。筆者の記憶では、1963年にイギリスの有名な天文学者、ジェラルド・ホーキンスが「ネイチャー」に論文を発表し、この遺跡岩の配置は、天文学的に考えたものであり、月と太陽の位置関係を配慮したもので日食を予測していたというものでした。

しかしこの見解もその後、否定的に見る研究者が現れており、この遺跡岩の配置と存在の意味は、まだ何も確定していません。しかし、遠隔地からこの平原まで人力だけで運び、それを組み立てていまの状態にした意味は何か。不可思議を超えて際限なく人間の才知を感じさせます。

ストーンヘンジをバックにした写真は、長い間筆者の憧れでした。人類の英知と力量を感じるからです。

見る角度によって容貌が変わる遺跡群像

現場を一周して分かったことは、見る角度によってストーンヘンジの光景が変わっていきます。つまりストーンヘンジの容貌が変わるのです。だから私たちがさまざまな写真で見ている遺跡岩は、皆違う光景であるはずです。

一周するようにコースを作ったのは、その全貌を見て欲しいという配慮からでしょう。しかも10メートルにも満たない至近距離から見る位置にも行くように、作ってありました。その地点には幾重にも人の輪が広がりました。

数メートルの距離になるとその存在感が、あたりを払うように押し寄せてきました。

写真で見るようにすぐ近くで手で触れるくらいの距離に来ると、圧倒的な質量感が迫り、この岩を「屋根」まで載せて作った先史時代の人たちは何を考えていたのだろうかと思わずにいられませんでした。屋根に当たる平らな岩石と、それを支える2本の岩柱との接点には、落下を防止するちょうつがい構造で固定されているというのです。

手で触れるくらいの距離から飽かずに観察する機会に感動しました。ゴツゴツした岩の構造物が、後生の人間に感動を与えるだろうと彼らが考えたことはないでしょう。しかしこれをつくった人たちは、現代人と同じような英知を備えていたでしょう。

すでにマンモスは滅び、現世の動物とほぼ同じ種に置き換わっていた動物群を追い求めていたクロマニヨン人たちは、私たち農耕民族とはまた違った価値観の中で独自の狩猟民族文化を築いていったに違いありません。

帰り際、ストーンヘンジに別れを告げようとしたとき、ある角度に気がつき、急いで回って撮ったのがこの写真です。

この角度で見た遺跡構造体が最も整っていると思ったからです。これこそストーン

ヘンジの正面から見た顔ではないだろうか。これをつくった一群のリーダーも、同じ思想で完成させたのではないだろうか。そういう思いを巡らせながら、撮影してきたスマホの写真を繰り返し眺めては、帰りのバスの席に埋もれていました。

さらばストーンヘンジ。もう二度と出会うことはないでしょう。しかしそれらは筆者にとって、永遠の輝きを宿して決して消えることない顔貌を心のひだに刻みつけたのでした。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 32

2024/06/05

悲喜こもごもロンドン後遺症

ロンドンの 2 日間の観光は、土日になったうえ、大規模な 2 つのデモとサッカーの国際試合が重なり、交通大渋滞などで上陸したツアーは、さまざまな影響を受け帰船後もあちこちで話題が沸騰していました。

オプショナルツアー参加者は、場所によって影響軽微だったグループもありましたが、もろにかぶって観光どころではなかったというグループもいました。

ロンドンの土日は、クローズしている商店や機関もあり、観光施設でも閉館という場所があったようです。何よりも土日は、観光地への人出が多く、接岸スケジュールに工夫がなかったのかという意見も出ていました。

世界観を変えたスマホ文化と自由行動

ツアーグループに対して、それなりに楽しんだのは個人で自由に市内を観光した人でした。電車や地下鉄、タクシーなどをうまく利用して目的施設に直行し、デモに遭

遇した人もいましたが、異国のデモ風景を見てそれなりに「観光」になったようでした。英語が通じることも自由行動に駆り出した理由になっていました。

話を聞いていて感心したのは、年代に関係なくスマホをうまく利用していることでした。若い人たちのスマホ利用術は別として、60 歳代以上の高齢者の方たち、特にご婦人の方のスマホ利用術が筆者の想像を遙かに超えて習熟していることに感心しました。というよりも感心する筆者の方が未熟者にとどまっているのでしょう。そういうことを感じることが、ままありました。

焼酎のボトルキープ、3 千円。夕食時になるとボトルを出し合って、あちこちで宴が始まります。貴重な情報交換の場になります。

実用的なスマホ活用は、体験がモノを言います。この種のツールは「習うより慣れろ」というように、体験することが最大の習得術になります。さらにご婦人たちは、スキルを伝搬させるスピード感が男性よりも遙かに早い。

ご婦人たちはきめ細かく、地図や施設の検索や確認。地下鉄などの交通情報の検索と確認。種々の買い物情報など実にきめ細かく情報を入手していました。

男性は気がついても機会がなければ黙っていますが、女性はおしゃべりの中であっという間に伝授していきます。そのような場面に出くわすと筆者は、関心しきり

ということになります。外国旅行でのスマホ利用は、想像以上の武器になることを船旅で感じました。船内での Wi-Fi 利用を始め、うまくこのツールを使いこなせば、格段に便利で効率のいい旅につながっていくようです。

屋上のデッキに集まってあれこれ話題を語り合うことも。情報交換の重要な場になっています。

一方で「スマホなんて関係ねえよ」と語っている一群の人たちもいます。PEACE BOAT では、さまざまなプログラムを準備して提供し、さらに乗船客が自主的に余技や趣味を披露・伝授して楽しませてくれるプログラムが毎日、開催されています。1500 人の小さな「村」が息づいていることを実感する日々でもあります。

教養講演が、毎日、船内のどこかで開催されています。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 33

2024/06/06

冷涼明媚なスカンジナビア半島に接岸

ロンドンから北上してスカンジナビア半島随一のベルゲン港に接岸されました。ノルウェーの首都オスロに次ぐ第二の都市であり、昔はヴァイキングの拠点でもあり、その後は交易都市として栄えてきた港です。今回の旅では、最も寒い地域に上陸するので、防寒には気を遣いました。次の寄港地のアイスランドは、もっと寒くなりそうです。

ノルウェー人は背が高い。第一印象がそれでした。男女とも金髪・碧眼でプロポーション随一の民族です。有名なベルクマンの法則では「恒温動物は寒冷に生息するほど体重が重くなる」とありますが、人間もクマやシカ類も野鳥も同じです。動物はすべて北方にいくほど同じ種でも大型になります。筆者が札幌に転勤でいたころ、スズメ・カラスの類いからすべての生息動物は、同種でありながら本州のそれよりも大型であり、ベルクマンの法則を知ったことを思い出しました。

ベルゲンは、その昔はヴァイキングの拠点のひとつであったようで、その後は海洋商業都市として栄え、ドイツのハンザ商人で形成していたハンザ同盟都市となって、スカンジナビア半島地域の仲介交易を独占していました。港湾に面した地域に、その歴史をとどめる古い建物と独特の商圏都市の風景をいまなお残しており、ユネスコの世界遺産にも認定されています。

船の窓から見た最初の光景は息をのむほどきれいでした。

タラ料理を食べ歴史を知る

バスを降りるといきなり魚市場に案内されました。タラ、カニが山と積まれ、北方海域で採れた豊富な海産物は日本向けにも輸出されています。日本ではタラちり程度でしか食べていませんでしたが、こちらではタラのムニエル、スープ、フライなど豊富なレシピがあることを知り、いくつも食べましたがこれが例外なく美味しい。料理法によってこんなに違うことを知り、この魚を見直しました。帰国したら、タラ料理を習熟したいと思ったほどです。

街並みは清潔感があり、多くの観光客と一緒になりました。

ベルゲンの歴史は、火災の歴史そのものであることも知りました。商都として栄えた 1000 年ほど前から商圏を巡る紛争や略奪、海賊襲来などで火を放たれることも多く、そのたびに教会はおろか木造建築物はあらかた焼失していたと言うことです。

日本の魚港とは違った風情がありました。

イギリス、オランダ、ドイツとの交易や大戦による敵対関係の戦争もありましたが、その後の復興で建てられた家屋は、やがて近代的でモダンな北欧文化を体現したような瀟洒な住宅や建築物になりました。世界遺産になるほどの美しい景観をつくったのです。

ケーブルカーで昇った山頂から見た雄大な景色は素晴らしいの一語で、しばらく見とれました。この景観を見に来る観光客が大勢来ており、写真撮影に追われましたが、絶景とはこういうものかと思いました。やはり実際に眼にする景観はとうてい写真などでは表現できないものでした。

山頂に、バカでかい奇妙な人形があり、大人気でした。筆者もちゃっかり子どものように握手してきました。

ノルウェー伝説・トロール人形と握手。怒らせるといたずらをするが、大切にすると幸せを運んでくる巨大なトロール人形でした。今もなお、ノルウェーに生き続けているそうです。

作曲家・グリークの家を訪問する

港街からバスで移動して、大作曲家エドヴァルド・グリークの家を訪問しました。グリークについては、筆者が中学生時代から姉の影響で、組曲・ペールギュント、ピアノ協奏曲などさまざまな名曲を聴いていたので、とりわけ親近感がありましたが、ノルウェー人とは知りませんでした。

行って見ると丘の麓から始まるこんもりした森の中に、緑に包まれた瀟洒な家があり、小さな博物館になっていました。グリークが作曲していた部屋もそのまま保存されており、ピアノ演奏家としても名を残したグリークのピアノもありました。

この家の前方には湖が見え、緑の濃い森の中に息づく芸術家のたたずまいを感じました。あの爽やかなペールギュントの出だしの朝が、すぐに筆者の中で演奏が始まりました。誰でも一度は聴いたことがあるあの曲です。筆者は数え切れないほど

聴いてきた曲なので、心の中でも自然と鳴り出しました。この名曲もこの森と湖の中で作曲されたのでしょうか。感動してしばらくたたずみました。

グリークが今、そこにいるような雰囲気の部屋でした。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 34

2024/06/07

ヨーロッパ最大級の氷河が作るフィヨルドを船上から見学

今回はスエズ運河航海を断念してアフリカ大陸最南端を回った航海になったため、ヨーロッパの魅力ある国への寄港が出来ませんでした。そのためもあって、フィヨルドの船上見学は楽しみの一つに浮上していました。ノルウェーのベルゲン港を出港した後、船は観光の拠点になっているフィヨルドに入り込み、船上から 360 度

迂回して景観を見せるというのです。その様子は、12 階のプールを囲んだ空間に乗船客が集まり、集合記念写真を撮るという趣向です。

甲板に出てみると寒い寒い。前日、購入したフード付きウインドブレーカーで凌ぎました。背景に見えるのがフィヨルドで露出した陸地ですが、曇り空でやや霧もかかり、よく見えません。甲板の天井には、スクリュー付きの大型救命ボートが設置されているのが見えます。

フィヨルドに船が入り込んだころ、船の 7 階の 1 周 500 メートル強の甲板廊下に出て、フィヨルドで出来た陸地の景観を見て歩きました。途中で、乗船している日本将棋連盟の棋士、高田尚平七段と出会い、甲板で記念写真を撮影しました。

高田七段とツーショットの栄誉をいただきました。

この地域の天候は、晴れたり曇ったり、雨が降ったりやんだりと山の天気と似ています。気温は日本の冬並みで風も強い。冬支度をしてこなかった筆者は、ベルゲンでフード付きウインドブレーカーを購入しました。厳しい冬をしのいでいる国の製品ですから、日本で見るウインドブレーカーとは全く違ったもので、流石によく出来ています。購入と同時にスーツの上から着てみたら、別天地のように保温効果がありました。

船はフィヨルドの名所へと入っていきました。ノルウェー南西部にあるフィヨルドで、全長 113 キロメートル、最大水深 564 メートル。ヨーロッパ最大級の氷河から出来たノールフィヨルドです。午後 6 時半から、12 階の広場に行って見ると乗船客が集まっていました。

モヤにけぶるフィヨルドの景観です。天気（自然現象）次第の景観というのもオーロラに似ています。

薄日の差す天気と思いきや、5 分後には曇りになり数分後には雨から氷雨になり震え上がりました。船が旋回を始めた時に合わせての記念写真でした。海上に開放された空間です。風があるし体感温度は 5、6 度ですから、前日、ベルゲンで買い込んだフード付きウインドブレーカーにマフラーを巻いて参加しました。

船の 12 階広場に集まって集合写真の撮影です。船が旋回して 360 度の景観を見せるという趣向でしたが氷雨の中で震え上がりました。

フィヨルドは、数万年もの時間をかけてつくられた氷河が自身の重みで斜面を滑り落ちながら地面を深く鋭く削り取り、深い谷を形成するのです。氷期の終わりごろ（約 1 万 2000～1 万 5000 年前）に氷が溶けて海面が上がったため、深い谷の一部が海に沈むことでフィヨルドができたという説明でした。

急に気温が低下してきたので、早々に集合写真を撮影すると、退散する人が続出してきたので筆者も早々に帰宅（部屋に戻ることを帰宅と言うようになってきました）。部屋の窓からフィヨルドに別れを告げていると、空は明るくなり、なんと薄日も差してきました。向こうに見える陸地では、色とりどりの家が見え、どこもかしこも緑の山と稜線がきれいな景観を作っていました。

この日の日の入りは 23 時 19 分ですから、まだまだ日は高いのです。いよいよスカンジナ半島から離れてアイスランドへの航海が始まりました。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 35

2024/06/09

白夜の船内生活

アイスランドに向かっての航海は、白夜の船旅です。6 月 8 日の日の出が午前 2 時 41 分、日の入りが午後 11 時 30 分ですから、太陽が隠れている時間はたった 3 時間あまり。部屋のカーテンを閉めておかないと、明かりに負けて寝付かれません。

船内の室温管理がうまくいっていないようで、筆者の部屋はひんやりして寒い。室温を最高にしていますが、コントロールがきかないらしく、寒いのです。体を動かしていれば寒さを感じないのかスポーツ関係のイベントはどこもほぼ満杯の盛況です。

筆者の日常生活の一端を披露すると、ほぼ毎日通っているのは、オカリナ教室と社交ダンス教室です。オカリナは船に乗ってから習い始めたもので、初心者ですからいい音が出せない状態が続いています。

ダンスは、歩行強化のために 20 年前から近所のダンス教室に通い、年に 1, 2 回のデモにも出演して鍛えてきましたので船では上級のクラスでも踊れるようになりました。

船内生活の写真集を作りました。

ヨガ教室はいつも満杯の人気です。写真は、全体の一部だけです。

アスレチッククラブも時間によりますが、満杯状況も少なくありません。

筆者は隣室のサウナを利用するのが日課になっています。

写真は折り紙クラブ。このような少人数の趣味・習い事のプログラムが多数あります。例えばこの日の船内新聞の案内をみると、お茶さろん、般若心経を唱える、切り絵、大喜利得意な人の集まり、ペタンクを楽しむ、水彩画教室、お手紙書き方、トランプマジック、各種ダンス教室、日本語・英会話教室、各種教養講演、映画、太極拳、浴衣を着て踊る会・・・まだまだキリがありません。

船内のあちこちに、写真のようなコーナーがあり、自由に使用できます。大抵は読書、PC などの操作で趣味や仕事、談笑の場などに利用されています。

寿司屋もあります。ネタはすべて日本から持ってきたもので、世界各地の魚の提供は禁止されていると聞きました。衛生上などの問題のようです。女性や外国人が握っています。写真は上寿司でこれで5千円です。寿司飯も国産のコメで美味しくいただきました。カウンターに座って握ってもらうという方法はなく、すべてこのようなセットの寿司提供です。

生バンドも毎日演奏しています。夜になると時間を区切って出演しますが、フロアもあるので音楽に合わせてダンスを踊ったり、ゴーゴーで盛り上がっています。主催者が設置する各種催し物の夜は、毎回、満員の盛況です。レストランでボックス

に料理を入れて持ち込み（無料）も可能なので、大変、便利です。飲み物も、ワイン一杯500円程度ですから、割安感があります。

「今日のランチはラーメン・餃子らしい」というので行ってみたら、写真のようなトレイでした。ラーメンっぽいものに、餃子2個、麻婆豆腐ごはん、ザーサイもちょこっとあってま、久しぶりの中華ご飯に満足でした。

この日は全員の防災訓練も行われました。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその36

2024/06/10

動く地球表層の岩盤（プレート）の上に立つ

氷河と火山の国、アイスランドの首都・レイキャビクへの上陸は、寒空の中で始まりました。首都としては世界最北の北緯 64 度 8 分です。この日の日の出は午前 3 時 3 分、日の入りは午後 10 時 24 分ですから白夜です。

アスランド旅行が日本人に人気があると聞いていたのですが、筆者には大きな関心事が2つありました。一つはプレートテクトニクスの現場が地上に露出しているのをこの眼で見たいという願望と、世界で最も男女平等を実現している国の現実を見てみたいというものでした。

プレートテクトニクスは、地球の表面を覆っている厚さ数十キロの岩盤（プレート）が常に移動しており、その岩盤が地球の地表に10数枚あるというのです。プレートがぶつかり合う場所で地震が発生し、アイスランドと日本は地震国・火山国・温泉国として共通の運命にあるのです。

プレートが露出している場所に行くバスツアーに参加しました。噴火した溶岩でできたレイキャネス半島の荒れ果てた荒野の中でバスを降りて歩いて行きました。奇妙な橋が見えてきました。その橋こそ、北アメリカプレートとユーラシアプレートを結んでいる橋なのです。

何十億年という地球の表面の岩盤の移動で北アメリカプレートとユーラシア大陸プレートがこの地で出会い、それが地上にそのまま露出して、今なお年間2センチの移動をしているというガイドの説明に興奮を覚えました。

冷たい風を避けた防寒具を着込んで、プレートテクトニクスの「現場」に立ちました。

筆者が立っている写真の向かって右の岩盤が北アメリカプレートで、左の岩盤がユーラシアプレートです。その裂け目をつないだ橋がバックに見えます。両方のプレートが押し合っているのでしょうか。ユーラシア大陸プレートをたどっていけば、日本列島を載せているプレートにつながっているはずです。

こんなプレートの出会いの現場に立つとは夢にも思っていなかったので興奮しました。1970年代になってからプレートテクトニクス論が日本でも盛んに紹介され、それを知った筆者は多くの文献を貪るように読みました。今ではすっかり忘れてしまいましたが、その興奮がよみがえったのです。

女性大統領が当選したばかり

今月1日、アイスランドでは大統領選挙がありました。投票率は約80%。12人が立候補し半分が女性です。女性候補で投資会社経営者のハトラ・トーマスドッティル

さん（55）が当選して8月1日に就任するそうです。アイスランドでは2人目の女性大統領です。最初の女性大統領は、1980年に当選したビグディス・フィンボガドッティルさん（94）で、世界で初の女性大統領として話題になったそうです。

アイスランドの国会議員は、男女ほぼ同数ずつです。世界経済フォーラムが発表する「ジェンダーギャップ報告書」で初版の 2006 年から 14 回連続 1 位になっています。世界で最も男女平等に近い国として知られているそうです。

ツアーのガイドさんの説明では、アイスランドには専業主婦はいないので、子育てや家事も男女平等でやります。育児休暇は、夫婦できちんと取ってお互いに助け合って子育てします。教育費と医療費はタダ。ただし給与のほぼ半分が税金でもって行かれるので、物価高の中での生活はそれほど楽ではないと言います。とはいうものの、日本に比べれば遙かに優れた福祉国家になっています。

人口僅か38万人の国ですが、悩みはそれなりにあるのでしょう。そのひとつがアルコール依存症が比較的多いと言うのです。長くて暗い冬の期間、アルコールに走る人が多いと言います。ネットで調べてみるとたいしたことではなく、年間のアルコール一人摂取量は、世界の国々では真ん中あたり。日本よりは多いですが、韓国、アメリカなどよりは少ない現状でした。

アメリカ大陸の発見者はコロンブスではない！

今回のツアーで最初に行ったのは、丘の上に立つハットルグリムス教会でした。アイスランドのランドマークタワーとして象徴的な建物で、遠くからはまるでアメリカのスペースシャトルの形にも見えました。そばまで行ってみると高さ 74.5 メートルある重量感に圧倒されました。ミサが始まるので中には入れませんでしたが、この教会の前に大きなブロンズ像があります。これはアメリカ大陸を史上初めて発見したアイスランド人のレイフ・エリクソンの像で、教会を背にして眼下に広がる市街地を見下ろすように屹立していました。

アメリカ大陸発見は 1492 年のコロンブスと知られていたはずですが、今では 985 年ころにエリクソンが最初に発見したと史実が書き換えられたというガイドさんの説明でした。日本の小中学校の教科書にも書いてあると言うことでした。エリクソンは、グリーンランドを発見して住み着いたバイキングの末裔であり、グリーンランドとアメリカ大陸を行き来していたとも聞きました。

このブロンズ像は、アイスランド建国 1000 年を祝って 1930 年にアメリカから贈られたものと言うことです。強い逆光で正面からは撮影できないので、後ろから撮りました。

博物館の巨大画面でオーロラを見ました

ペルトラン博物館の巨大画面では、オーロラを見せてくれました。オーロラ見物のために日本からも多くの観光客が来るそうですが、運が良ければ見られるという自然現象です。こうして実際の光景を見る気分で巨大スクリーンで見るオーロラは迫力がありました。

余った電力を輸出

アイスランドのエネルギー源は、地熱発電や風力発電だけであり、自然エネルギーだけで国が成り立っています。電車や地下鉄はなし。バスはすべて電気自動車です。電力は余っているので海中ケーブルでイギリスに輸出しているのです。この国の産業は、①観光、②漁業、③アルミ加工というのです。アルミ加工は電気を食うので、外国企業が、電気代の安いアイスランドに進出して経営していると言うことでした。

遠くから見た地熱発電所。この国は森は少なく、荒れ地のような平原が広がっていました。

年金平均 70 万円だが・・・

ランチに出てきたタラのムニエルも美味しかった。写真を撮るのをうっかりして食べてしまいましたが、タラ漁業が大きな輸出産業になっていました。

リタイア後の年金は、平均で毎月 70 万円相当と言うことにびっくりしましたが、かなりの物価高で生活は思ったほど楽ではないようです。ランチに 3 千円から 4 千円。夜のレストランの食事はワインを楽しんで一人2，3万円ということです。

お土産ものを物色しましたが、ちょっと大きめのチョコレートが1枚2000円、コースター枚1500円。ちょっと魅力的なストールは4万円と言う値札でした。一緒にツワーに参加したご婦人たちもこの値段には驚いて、財布は出てきませんでした。

アイスランドの一日だけの上陸ツアーは、盛りだくさんの見聞の中で白夜は暮れていきました。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 37

2024/06/14

船内の大劇場で乗船客主体のイベントを開催

「地球一周中間発表会」という催事があることは、繰り返し船内新聞でも告知があったので知っていました。10 日ほど前から船内のあちこちで、何やら準備する様子を見ていましたが、なに、たいしたこともできないだろうと見ていました。

先にも紹介しましたが、船内にはさまざまなテーマの集まり、グループが出来ており、多分その数は 50 くらいあるでしょう。そのグループの人たちが何やら趣向を凝らしてビスタラウンジという学校の講堂を思わせる広い会場で披露するのです。

演劇が出来るほどの広いステージもあり、ちょっとした劇場にも見えます。そこのステージでグループが準備した演題で発表するというものです。聞けば、大人の「学芸会」というものだそうで、筆者はどこにも属していないので何も予定はなく、当日は見物人として覗くくらいの気持ちでいました。

突然の申し入れにびっくり

前日の 6 月 12 日の夕方、船内を歩いていたら突然、韓国の女性から呼び止められ「明日のヨガの会で出て欲しい」という相談を受けました。ヨガの会が盛況であることは見て知っていましたが、やったことはない。聞けば、ヨガの会の有志がステージに上がり、音楽に合わせてゴーゴーを踊るので、それに合わせてステージ下のフロアでジルバを踊ってほしいと言う話です。

リーダーになる男性が 1 人どうしてもいないので、是非、お願いしたいという申し入れです。ダンスレッスンのときに筆者がジルバを踊っていたのを見ていた婦人が、船内で歩いているうち出会い頭に思いついての懇請でした。

予定がなかった筆者は、これを引き受けました。ぶっつけ本番の「出演」です。多少不安はありましたが、学生時代にジルバに狂っていたことを思い出し、なんとかなるだろうという気分でした。

地球一周中間発表会 昼の部		（出演時間目安）
1	チーム三線	13:30～
2	プロデュース 117（キッズ）	
3	カルチャースクール おはよう太極拳	
4	はじめくん	
5	ミニ琴と朗読 平家物語	
6	カルチャースクール ヨガ	14:00～
7	DHARMA BUDAYA	
8	草笛教室	
9	ききヨガ	
10	カルチャースクール 社交ダンス A	14:20～
11	ベトナム語語劇団	14:30～
12	伊勢音頭の会	
13	QI GONG EXERCISE	
14	カルチャースクール 社交ダンス B	
15	Janeとフレンズ	
16	横笛同好会	15:00～
17	プロデュース 117（リーブハイ）	
18	Miyamo	
19	広場ダンス	
20	ウクレレとオカリナで歌おう！	
21	小倉祇園太鼓	
地球一周中間発表会 夜の部		**（出演時間目安）**
1	プロデュース 117 B ガールズルール	20:00～
2	ZUMBA	
3	中文教室	
4	入門太極拳	
5	あさりちゃん	
6	スジン＆はじめくん	20:30～
7	117ダンスクラブ	
8	24式太極拳	
9	そねっちのジャズギター	
10	ボッサ・アミーゴス	
11	初めての社交ダンス	
12	踊りのミチグループ	21:00～
13	プロデュース 117 A TOXIC	
14	La fleur	
15	Special Guest	
16	日本語教室の仲間たち	

当日、早めに会場に行くと、すでに始まっており、驚いたことにこの日の昼と夜で37 演題の発表があることでした。終わってみれば延々6 時間に及ぶ船の「学芸会」でした。

ステージ下まで繰り出してのチーム体操？でしょうか。力作でした。

楽器に合わせて詩の朗読もありました。どちらも聴かせました。

日中韓・ベトナムなど国際色豊かですが、日本人主催が圧倒的に多く、その中に外国人が混じっているという感じです。出し物は、歌と踊りが多く、民族楽器の演奏や子どもを交えた体操もありました。

急ごしらえの学芸会にしては、どの演題もなかなかの出来映えです。

アイスランドから次の寄港地のニューヨークまでは少々日数がかかるので、その間、船内での余興大会で盛り上げようという PEACE　BOAT の思惑でしょうか。

気功の披露もあり、会場と一体になった演技でした。

出番が回ってきました。パートナーさんとして踊る韓国婦人は、年齢不詳ですがプロポーションのいい方で、見るからにダンスの出来そうな方でした。しかしジルバ

はそれほどやったことはないそうで、どうやらお相手もぶっつけ本番の様子で「安心」しました。

にわかコンビのジルバでしたが、船の揺れに乗って？うまく踊れました。

曲目が流れてすぐに始まりました。ステージの上では、老若男女が軽快なステップを踏んだり、体を動かし、それが音楽に合っているのです。終了後にわかったことは、ヨガが終わると毎日、練習に励んでいたということでした。

筆者も、踊り始めると「昔取った杵柄」と言う古い言葉で言えるほどに、軽快にパートナーさんを回し、自身も船の揺れに合わせて踊るという得意技を発揮して、あっという間に制限時間を終えて、大喝采の中で退場しました。この機会にヨガの会にと誘いを受けましたが、それは丁寧に断って早々に退散しました。

日本のお札のリニューアルが心配事

ランチの食卓で話題になったのは、日本のお札のリニューアルのことです。千円、5千円、1万円札の肖像が変わるのは７月３日と聞いています。すでに一部の街の

両替屋では、日本のお札は間もなく新札が出るという理由で拒否するという話も出ています。外貨が手元にないとタクシーや街頭の店ではカード決済が出来ません。そこへこんな話が出てきたのです。

セーシェルでタクシー観光したあとの支払いで、ドル札を出したら 2008 年以前の発行年のものは取らないと拒否されたそうです。持っていたドル札は古いものばかりでしたが、いずれもいま使われているお札です。居合わせた 6 人が急いでお札を出し合ってギリギリの金額がそろったそうですが、日本のお札も新札が出たら古いお札は拒否されるのではないかという心配事です。

タクシーの運転手さんの話では、客からドル札（外貨）を受け取って、現地の銀行や両替屋に持っていき現地のお金に替えようとしても、発行年が古いと出来ないということでした。いま流通しているかどうかの判断ではなく、現地の金融筋の意向だという話でした。

ニューヨークに行ったら、少々多めに両替しておかないと中南米や南米ではどうなることか。そんな心配事で話題が広がっています。

船旅も後半を迎えて隣近所の付き合いに広がる

船は北極海に入ったコースをたどりながら北米大陸へと航路をとる予定でしたが、北の海が荒れており、天候不順ということで航路を変更し、一直線に北米からニューヨークへと向かう航路になりました。確かに海のうねりが大きくなり、船内の廊下を歩いていても左右の壁にぶつかりながらの移動になってきました。

昨日から甲板へ出るのは禁止。時化の海で船は大揺れに揺れています。これまで一番の揺れかもしれません。窓から見た海はモヤの中に呑み込まれており、船腹で打ち返されささくれだった波が恐ろしげな泡を巻いて限りなく繰り返していきます。

自室の窓から海を見るとモヤに呑み込まれて何も見えず、船腹にぶつかって出来た恐ろしげに渦巻く白い波だけが繰り返し去って行きました。

海上の風も強く外の気温は 6、7 度、水温も同じと言うことで、屋外のジャクジー風呂も閉鎖になっていました。

船旅も後半に入ると、乗船客同士、顔見知りが多くなり、行き交う人が軽く会釈をすることが多くなりました。朝夕のレストランの食卓も、やあやあと挨拶する人が増えて会話も広がり、雰囲気が変わってきました。

筆者はこれまで 4 回の講演をしました。学校給食は世界一、沖縄返還の密使・密約問題と真実の追究、イベルメクチンとコロナの真実、野口英世のノーベル賞物語がそのテーマでしたが、いずれも好評をいただき、知らない人から「面白かった」という感想をいただいていました。

今後も新札の肖像替えで登場する北里柴三郎物語などいくつかのテーマを準備しており、PEACE　BOAT 関係者からも相談を受けるテーマも出てきました。構想

研究会創設 25 周年記念シンポジウムを自分なりに総括する講演も準備を進めています。

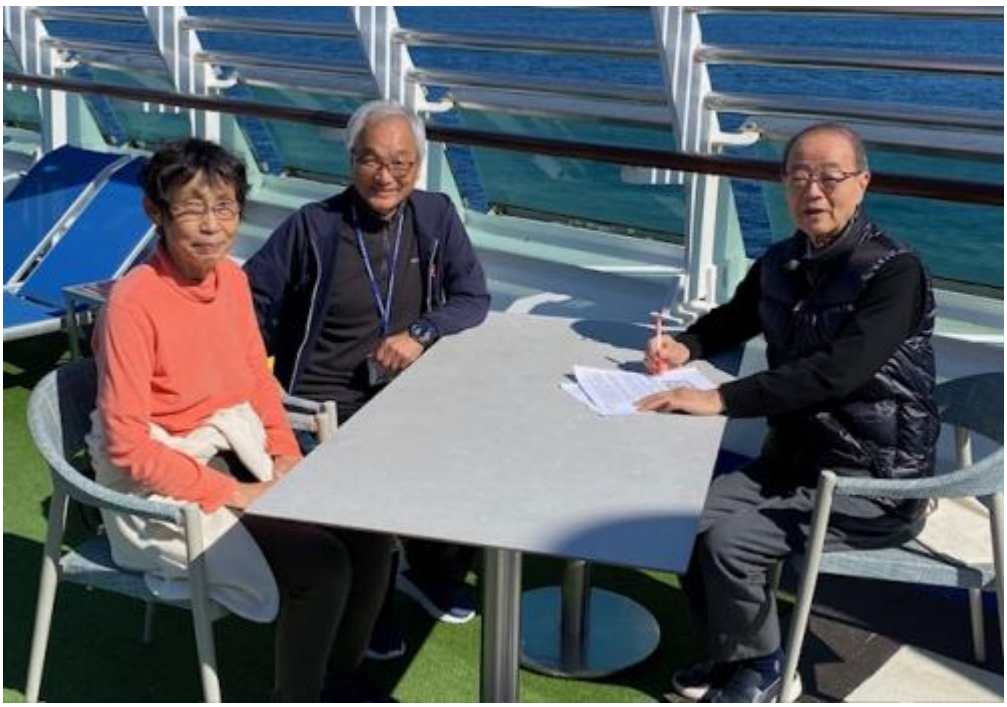
PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 38

2024/06/17

広島県から参加した元教員ご夫婦

PEACE BOAT に乗船している方々は、実に多彩な経歴を持っている人ばかりです。その中から筆者が何かの縁で知り合った方をブログで紹介したいと思います。

最初に登場していただいたのは、広島県三次市から参加した藤原孝次さん(68)、ひとみさん(66)ご夫妻です。筆者が「日本の学校給食は世界一」というテーマで講演した際に参加していただきました。



14 階、船の屋上でインタビューしました。

お二人とも定年まで小中高の教員をされていた方で、最初に会ったときから率直に語るお人柄が気に入りました。お二人とも教員 OB・OG ということから、構想研創設25周年記念シンポジウムを思い出し、その後は日本の小中学校の教育について語り合う機会が増えました。

船旅も中間点を通過して、先日は有志参加の「学芸会」が開催されました。お二人は今回、社交ダンス発表会の出演は見送りましたが、船に乗ってからレッスンを受けており、8階のフロアで練習に励んでいる姿を時折見かけていました。ワルツ、タンゴ、ルンバ、ジルバに挑戦中で、船を下りるころにはかなりの腕前になっているでしょう。

PEACE BOAT は、持続可能な未来へ向けた自治体の取り組みを支援する国連の SDGsを推進しており、リベラル思考の活動をしていることも気に入り、このクルーズに参加したとのことです。

外国旅行は、新婚旅行でハワイに行ったときから、ほぼ40年ぶりということす。2018年に PEACE BOAT に申し込んだもののコロナ禍で中断したため、今回の旅は待ちかねたものだったようです。

「1500人の乗船者ですから予想はしていましたが、若い方から年配者まで実に多彩な人生を送られてきている人ばかりで、講演や各種の集まりなどで交流が出来、楽しい船旅をしています」

これまでの寄港で上陸された都市の印象などをお聞きしました。

最初に写真で見せられたのは、なんとライオン君です。南アフリカ共和国（南ア）の自然公園のサバンナで撮影したもので、昼寝を起こされたのか大きなあくびをして歓迎してくれたそうです。観光車両から至近距離の撮影であり、珍しい写真を手に入れました。

次に見せられたのは、茫漠と無数の砂丘が連なっているナミベア共和国の砂漠で撮ったものです。世界最古のナミブ砂漠は、無数の砂丘を連ねたような雄大な景観です。藤原さんは「砂の粒のきめ細かさを手のひらで感じました。数千年の自然環境の中で出来た奇跡の産物です」という感想でした。

小中学の教育問題で船内グループに参加

現役だったころは、二人とも初等中等教育の最前線で教師をしていたので、乗船客の若手グループが企画している「小中学校の教育を考える」会に参加しました。教育の立て直しなどを討論し、シンポジウム開催にも参加して教育問題の課題解決の提言もする予定とのことです。

いま話題になっている工藤勇一先生の著書も何冊か読んで感銘を受け、「素晴らしい論点ですが、具体的に工藤先生の提示する教育現場を実現するには、大きなハードルがあります。しかしそれを乗り越えて教育再生をはかるための方策も考える必要があります」と言います。ひとみさんのご意見も同じであり、二人の意見を調整しながら発言していく方針のようです。

アジア・アフリカ・ヨーロッパと回ってきて地球を半周したことになりますが、諸国で見聞して何が一番印象的だったのでしょうか。

「先史時代の歴史的遺跡から現代の社会の様子まで、時空を超えて見聞して私たち夫婦の視野を広げる機会になりました。人間のやってきたことは、人種とか肌の色とかに関係なく闘争の歴史であり、人を殺し、勝ったものが略奪する人間の闘争本能を垣間見たところがありました。毎日が社会科の勉強のような気持ちです」

数学の教師らしい孝次さんの感想でした。リタイア後は地域の民生委員などいくつかの社会貢献の役職を委嘱されており、今回は多忙の合間を縫っての PEACE BOAT 参加でした。

ノルウェーのベルゲン市では、フロイエン山頂からの絶景をバックに記念撮影。世界には息を呑むような光景が随所にあることを知り、日本の風光明媚を一瞬、忘れるところだったようです。

セントポール大聖堂の前で。そのほか、ロンドン塔、大英博物館、ウエストミンスター寺院などを見学しました。ロンドン塔は13世紀から処刑する監獄にもなりました。ひとみさんは「多くの政治犯が処刑されていった話を聴いて胸が痛みました」と語っています。また「大英博物館」の見学では、諸国からの財宝・秘宝を集めた展示品を見て、英国の歴史的な「活動歴」を改めて認識したようでした。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 39

2024/06/17

7人の「ウクライナ・ユース・アンバサダー」が乗船

停戦の気配がないまま泥沼化しているウクライナ戦争の不条理と戦場の悲惨さをPEACE BOAT から世界に発信するイベントが開かれました。ウクライナから参加した 7 人の「女性大使」が主催者になり、船の屋上の広場でアピール宣言をしました。乗船客延べ約 200 人が参加して大使たちを元気づけ、支援を約束していました。

横浜の出港時から乗船しているのは、在日ウクライナ大使館と PEACE BOAT が連携して組織した「ウクライナ・ユース・アンバサダー」7人のうら若き女性大使です。20, 30 歳代の若さあふれる華やかさがあり、船内でも目立っていました。

これまで船内のセミナーや講演で、ウクライナ戦争の悲劇だけでなく、ウクライナの歴史や文化を理解してもらうイベントを続けてきました。後半にさしかかり、一区切りの時期を捕らえて平和を訴えるアピール宣言を開催することにしました。

インタビューに答える 3 人のウクライナ乙女たち。

この日、船の屋上 14 階の広場には、次々と乗船客が集まり、用意しているプラカードを掲げて女性大使たちを支援し、ウクライナ国民を励ますメッセージを次々と発していました。

全員集合でアピール写真を撮影して、世界に発信して平和への願いを船上から訴えました。折しもスイスのビュルゲンシュトックでは、100 カ国・機関の代表（このうち 57 カ国は首脳級）が出席する「世界平和サミット」が開催されました。ウクライナのゼレンスキー大統領が自らの和平案の支持を呼びかけたこともあり、PEACE BOAT からの船上アピールはいよいよ盛り上がりました。

「大使」たちの主張を聞いていると、ロシアの侵略戦争なのに、長期化してくると世界の人々の興味が薄くなっていく。長引かせることはロシアの思惑でもある。興味を薄くして自分たちの立場を正当化していく。こうした訴えを聞いていると、やはり戦争は国家の勝手な思惑と主張から出てくるものだと思わざるえませんでした。

筆者は旧ソ連時代からウクライナには5回行ったことがあります。チェノブイリ原発事故調査団で行ったときは、いま石棺に封じ込まれた原発の前まで行きり、かなりの被ばくをしました。また1万年前、マンモスハンターとして広大なユーラシア大陸に広がっていたクロマニョン人の作ったマンモスの骨で作った住居や多くの石器類の遺跡を取材で尋ねたこともあり、ウクライナは筆者にとってことのほか親近感のある国です。

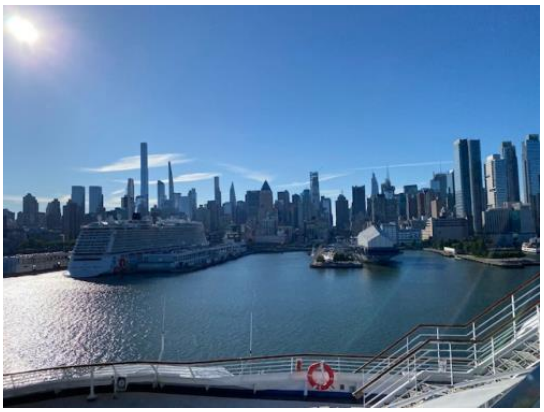
ウクライナは、世界の「美人国」の一つに加えられる民族であり、明るい気質はロシア人とは違った面を持っています。広大で肥沃な国土がいま戦場になっていることを憂いながら、これからも支援する約束をしました。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 40

2024/06/19

自由の女神から始まったニューヨーク寄港

ハドソン湾に船が入って間もなく、早暁の薄明かりの中に自由の女神がぼんやりと浮かんできました。甲板に並んで待っていた乗船客から、一斉にどよめきが広がりました。アイスランドを出港してからちょうど一週間、北の寒い海を航海してきた閉塞感がありました。誰もがニューヨーク寄港を今か今かと待ち望んでいたのです。



船は速度を上げたように感じました。遠くぼんやりしていた景色がみるみる輪郭を表し、やがて摩天楼が次々と姿を見せ始めました。これまでの寄港地とはまったく違った、世界一の大都市の風格を見せ始めたのです。船から見る摩天楼は壮大な規模を誇り、やはりニューヨークは別格だなと思わせる景色が次々と移っていくことに改めてびっくりしました。船からの景色の迫力を感じました。

Wi-Fi 接続の不調に慌てる

どこの港へ接岸するときでも、船の Wi-Fi 接続が短時間、途絶えます。ニューヨークでも同じでしたが、少々時間が長引きました。しかし待てど暮らせど普及しません。イライラして部屋でくすぶっているうち、我が PC の不調に気が付き、大慌てで対応に追われましたが、そのうち Wi-Fi の契約時間が切れてしまったのです。船内の Wi-Fi 再契約の窓口に駆けつけると、ニューヨーク出港まで閉鎖ということになっていました。

船はニューヨーク港 90 番ふ頭に接岸しました。となりのふ頭には、ノルウェーからの大型客船（多分 1000 人以上が乗船）が停泊しており、接岸すると大きなマンションが二棟並んだような景観になりました。およそ 30 年間の話になりますが、ニューヨークには取材で何度か来ています。あのころの印象とどう変わったか。入国審査後に早速、街に繰り出しました。

PEACE BOAT が接岸した隣のふ頭に停泊していたノルウェーの豪華客船。

その大きさといい豪華さといい負けそうでした。

全体的な印象をいうと街がきれいになっていました。自転車の駐輪場があちこちの通りにあり、家族連れでチャリンコ散歩を楽しんでいる風景もあふれていました。人が集まるような場所には、警察官とは違う派手な制服を着たパトロール隊員の姿も見え、街全体のセキュリティへの配慮も感じました。

何よりもあの 30 年前と違ってホームレス、物乞いの姿は全くなくなり、きれいな街に変わっていることを感じました。

ニューヨークには 2 日間の停泊です。PEACE BOAT には多くのツアーが用意されていましたが、筆者は初日の夜にジャズ演奏の鑑賞、2 日目はバスでマンハッタン車窓観光とハドソン川遊覧クルーズに乗船して、川から街の景観を楽しむツアーに参加しました。

便利なことに 90 番ふ頭からニューヨークの中心街のタイムズスクエア、セントラルパーク、五番街などへは歩いて行ける距離にあります。散歩がてらと言ってもそれなりに距離はありますが、田舎者の見物には格好のコースでもあります。

PC 持参でレストランで執筆開始

日曜日のマンハッタンはどこもかしこも、ものすごい人出でした。観光客があふれており、レストランやコーヒーショップを覗くとどこも満杯。PC 持参をしてきたので、どこかで Wi-Fi 接続をしてこのコラムなどを書く魂胆でした。早々に繁華街を退散して港に近い比較的人出の薄い地域に戻り、すいているレストランでこのブログを書き始めました。

アメリカは流石にどの店も Wi-Fi 接続が簡単で、従業員がセットしてくれる店もあります。日本ではこうはいかないなと思いながらレストランを 2 軒はしごして楽しみました。PC を見せて作業するふりを見せると、すぐに店の端っこの邪魔にならないような席に案内してくれます。こうなるとチップもはずもうというものです。

こうしてニューヨークへの第一歩が始まりました。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 41

2024/06/19

NY ジャズクラブの雰囲気に浸った初日の夜

ニューヨーク初日の夜は、ジャズクラブに行って NY のジャズライブを楽しむことにしました。PEACE BOAT から 30 人のツアーバスで出発。マンハッタンの夜をバスの車窓から見物しながら目的のクラブハウスに向かいました。日曜日の夜、人出は相変わらずでアメリカ随一の歓楽都市の一端を見ながら、おのぼりさん気分に浸りました。

ジャズハウスの雰囲気満々の入り口でした。

目的のクラブに着き、入り口を一見してその雰囲気を感じました。この夜は、筆者たちの貸し切りという待遇です。編成は「The Creole Cookin' Jazz Band」で、すでにプレーヤー6 人がステージに座って待っていました。トロンボーン、トランペット、クラリネット、ピアノ、ベース、ドラムスのセクステット（Sextet）です。

筆者は一番前から 2 列目の真ん中あたりで、プレーヤーとは数メートルの至近距離に座りました。如才のないにこやかなプレーヤー面々の表情がとてもいい感じです。しげしげと拝見すると、どう見ても後期高齢代の人ばかりです。これが気に入りました。日本でもかつて原信夫とシャープス＆フラッツ、有馬徹とノーチェ・クバーナなどトップバンドで活躍した元プレーヤーたちが、時たま仲間同士呼びかけあってフルバンドを編成して演奏してくれますが、いつも満員の盛況です。すぐにそれを思い出しました。

演奏が始まると、聞いたことのあるナンバーが次々と出てきて、プレーヤーも楽しんでいる様子が伝わってきます。ビールのボトル片手についついこちらも興に乗って、リズミカルに身体が動いていきます。ステージ前のせまいスペースにおばあちゃんが出てきて軽快にステップを踏み始めると、バンマスのトランペッターが喜んだ動作で歓迎しています。

誰も出てこないので、ここは一番、筆者の出番と思ってすぐに加わり、往年のリズミカルステップでおばあちゃんと踊り始めると、次々と加わる人が増えてステージと客席は一体感で燃え上がりました。

会場と一体感のあるジャズ演奏で盛り上がりました。

昔、ニューヨークの他のジャズクラブに行ったことはありますが、踊ったのは初めてです。人生最後の「見せ場」と筆者は思ったかもしれません。休憩を挟んで、楽しい時間はあっという間に過ぎ去っていきます。休憩になるとバンマスも客席に座って談笑に加わります。筆者は、最も年配者の思われるベース奏者に礼を言うためステージに上がって素晴らしい演奏を褒め称え、ついでに「おいくつですか？」と聞いてしまいました。

なんと「88 歳」といいます。「あなたは私の兄さんです。私は 83 歳です」と言ったら、顔をくしゃくしゃにして喜び、お互いにハグして喜び合いました。

ベース奏者の「88 歳の兄」とのツーショット

帰りがけもう一度ステージまで行って、お別れの挨拶をして写真を撮り、とっさに持っていた手提げ袋にサインを書いてもらいました。隣で見ていたドラムスのおじいさんが、うらやましそうにしていたので、この方にもサインをお願いしてお別れしてきました。

子どもに還ってサインをおねだりしていただきました。

その昔、ジャズの本場のニューオリンズのライブハウスをハシゴしたことがありますが、意気のいい若手や壮年代の演奏もいいですが、筆者はどちらかというとベテランプレーヤーのスキル満点の演奏が好きな方です。演奏が進むに従ってステージと客席が一体感になって、最後はお互いに身体が動き出して止まらなくなると言うこともありました。

この夜は、ベッドに横になっても、ライブ演奏のあのリズムと音が身体の奥で鳴り止まずにずっと鳴り響いていました。ニューヨーク初日の夜は、こうして暮れていきました。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 42

2024/06/20

ハドソン川のクルーズ観光に参加

ニューヨーク 2 日目は、バスでの市内観光とハドソン川のクルーズ見学にしました。滞在は 2 日に決まっており、10 コース以上のオプショナルツアーのどれに参加するか迷いましたが、ハドソン川からの景観に期待しました。

バスはニューヨーク市街でも最も賑やかな地域を通過するコースをとったおり、最初に見せられてのが「トランプタワー」でした。ニューヨーク・マンハッタンの 5 番街にそびえる高さ 202 メートルの超高層ビル。ビジネスオフィスの上層階には、世界的な大金持ちが数多く入居しているようで、家賃は月額 700 万円とも聞きました。

トランプタワーの周辺は、見物人が多数集まっているようなので、敬遠して迂回しました。

セントラルパークの東側、アッパーイーストサイドのミュージアムマイル沿いにあるメトロポリタン美術館周辺は、観光バスがぐるりと取り囲みすごい人だかりの中にありました。広い敷地の中にスケールの大きい建物であり、この地域のミュージアムでは存在感抜群の感じでした。

絵画・彫刻・写真・工芸品・家具・楽器・装飾品など約 300 万点の美術品を所蔵しており、全館を一日で巡るのは不可能です。それを筆者らのツアーは、1 時間程度、見物するというスケジュールです。こちらのガイドさんに聞いたら、1 週間かけて見学しないと満足出来ないということでした。

「The MET」と呼ばれるほど貫禄あるミュージアムですが、これが私立と聞いて驚きました。歴史のある美術館などの施設・建物は、公立が多いと思っていましたが、The MET は別格のようです。

メトロポリタン美術館の周辺は華やかさのある見物人であふれていました。

ハドソン川のクルーズに乗船しました

クルーズ船の集まっているハドソン川の地点にバスで行き、そこから船に乗り換えました。かなり大きな船で、乗船客は 200 人はいたと思います。速射砲のように早口のガイドさんの英語の説明でしたが、歴史的な出来事や数字がやたら多く、うまくキャッチ出来ませんでした。ニューヨークの顔になっている自由の女神像のすぐそばまで接近しましたが、そちらにも大勢の観光客が群がっているのが見え、ニューヨークの集客力は流石にすごいなと感じました。

船を下りてから五番街付近に戻り、ステーキハウスでランチしました。バカでかいステーキが出てきて参加した皆さんと共にアメリカの食の話題を語り合いながら、8 割方食べるのがやっとでした。サラダもてんこ盛り、デザートも大きなケーキであり、いかにもアメリカに来たという実感が沸いた食卓でした。

街を散策しているうちニューヨークのコンビニを見つけました。写真で見るように小ぶりな入り口であり入ってみると、狭い空間に飲み物類と簡単なスナック類がぎっしりと並んでいるだけでした。お客さんも他に一人いただけで、レジにはご老体が退屈そうに座っており、日本のコンビニとはまるで違う風景でした。ニューヨークのど真ん中のコンビニですから、こんなものなのでしょうか。

自転車で散策している人が目につきました。写真のように貸し自転車と駐輪スタンドがあちこちにあり、スタンドから勝手に借りてまたスタンドに戻すというシステムです。支払いもクレジットカードで出来ると言うことですから便利です。日本でもこのシステムは広がるのではないかなと思います。

ニューヨーク滞在はたったの 2 日間であり、着いてすぐまた出港かあという気分でした。ニューヨークでの他の乗船客の行動を聞いたところ、オプショナルツアーに参加しないで、自分で地下鉄、タクシーなどを利用して目的の場所や施設を見物している方がかなりいました。船に乗っている間に旅程を組み立て下船して実行できるという利点をフルに使っているようでした。

夜になって船は離岸を始めました。瞬く間に夜に浮かぶ摩天楼は離れて行きます。もうアメリカに来ることはないのではないかと思っていると、突然、その昔ニューヨークの常駐特派員として異動する内示を受けたことを思い出しました。その話は、前任者が現地で問題を起こしたことがきっかけでニューヨーク支局を取り潰すことに発展し、実現できませんでした。

あのとき、特派員として出ていたらどういう人生になっていただろうか。船尾のデッキに寄りかかりながら、遠くで明滅するニューヨークの明かりに別れを告げました。船は一路南米のコロンビアを目指して航海を始めました。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 43

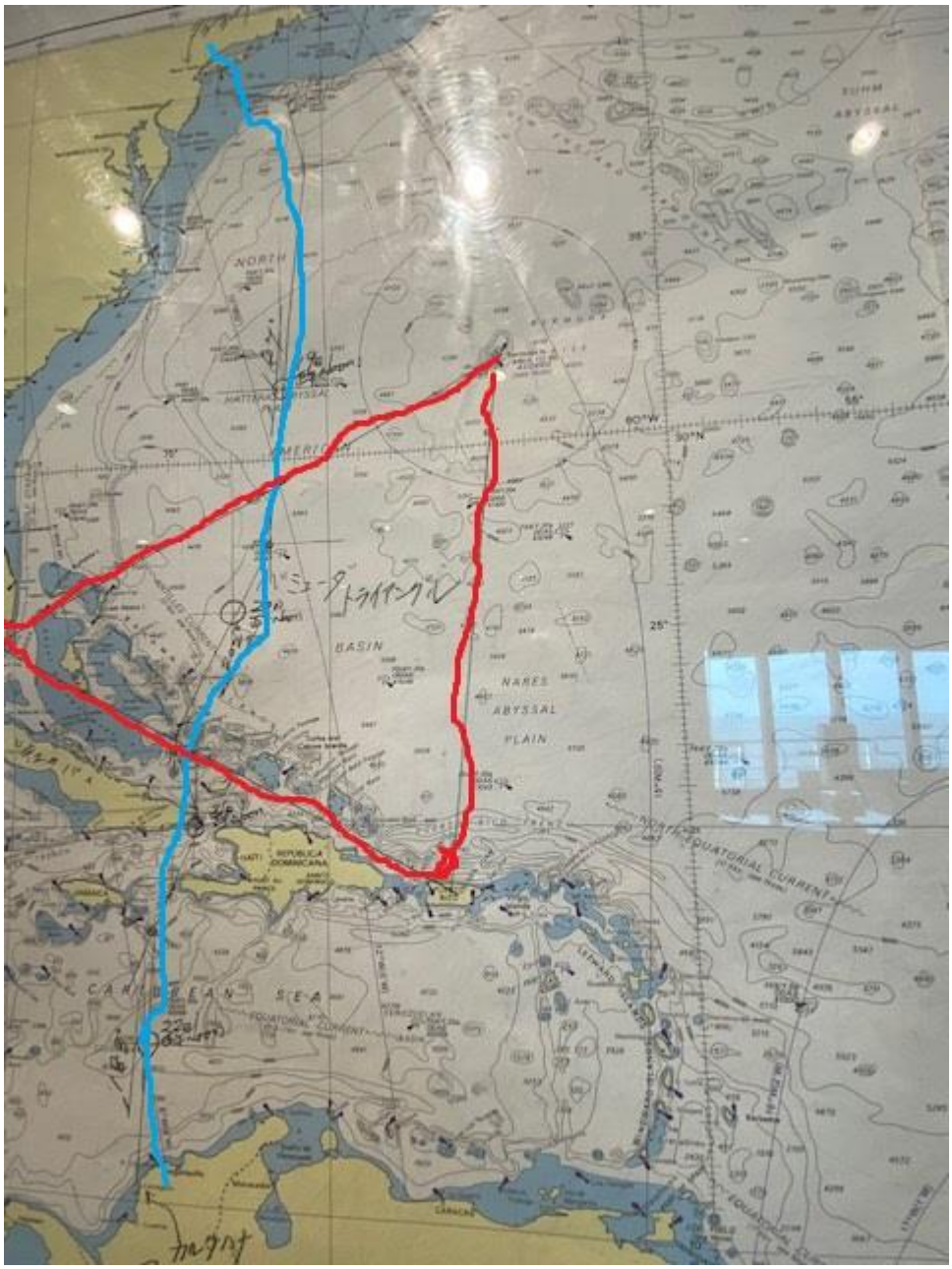
2024/06/25

バーミューダトライアングルに突入

多くの方はご存じと思いますが、フロリダ州マイアミ、バミューダ諸島、プエルトリコを結ぶ三角形の海域は、バミューダトライアングルと呼ばれています。バーミューダトライアングルは別名、「魔の三角海域」とも呼ばれており、海が荒れ狂うことで知られています。

面積は約 100 平方キロメートルで、この海域での船舶や航空機などの遭難が多く、過去 100 年間に多くの船や航空機が遭難し、跡形もなく消えているという衝撃事故が相次ぎました。

その魔の三角海域に、自分の乗船した船が入っていくとは思ってもいませんでした。毎日のように 7 階の PEACE BOAT 事務局に張り出される航海の海図は、最初こそ珍しさもあってよく見に行きましたが、そのうち忘れてしまうほど存在感が薄くなっていました。



海図の中の青い線が航海路です。赤い線の三角形がバーミューダトライアングルです。ニューヨークからコロンビアのカルタヘアに向かっている航海図です。

ニューヨークを出て 2 日目くらいから、船の揺れが大きくなってきました。食卓の話題も船が揺れる話が多くなり、ついに船酔いになったという告白も聞きました。そのとき筆者は忽然とバーミューダトライアングルを思い出し、航海海図を急いで

見に行って、まさにそのトライアングルのど真ん中を航海していることに気が付きました。

ここまで2ヶ月余の航海の中で一番、揺れが大きく激しいのです。しかし船は、荒れ海に立ち向かうように速度を上げています。船が蹴散らしていく白い波頭も恐ろしいほど荒々しい飛沫をあげている様子が窓からも見えます。これで本当に大丈夫なのだろうか。そのさなかに乗員スタッフだけの救難訓練があって、装備したスタッフが船の要所に配置され、訓練動作の確認などをしていますが、特段の緊張感もなさそうだし、いつもの訓練の一環であるようでした。

沖縄の日に PEACE BOAT と共催の講演会

6 月 23 日は、先の大戦で亡くなった「沖縄戦犠牲者への哀悼の意と世界平和を願う慰霊の日」になっており、PEACE BOAT でも沖縄慰霊や今の沖縄を紹介する催事などが開催されました。その中で筆者にも沖縄講演会の再演の依頼が来ました。

先の講演会は筆者の講演時間の勘違いから 2 回に分けて行ったことになりましたが、今回はさらに内容を発展させ、日本の民主主義を考えることまで広げることにしました。

歴史的事実を検証しない日本に民主主義はない

筆者の講演内容の前半は、前回と同様、国会にも国民にも真実を知らせない沖縄返還の密使・密約外交のすべてを検証した結果を紹介しました。

繰り返しになるので、ここでは詳しくは書きませんが、拙著「沖縄返還と密使・密約外交、宰相佐藤栄作最後の一年」（日本評論社）は、昨年度の日本新聞協会賞の候補作として推薦を受けたものでしたが、結果は賞の授与までには至りませんでした。しかし今でも、読んだ方からありがたい感想が寄せられています。

ま、そんなことは言いませんでしたが、事実だけ、と言っても筆者が調べたことはほとんどなく、すべてはアメリカの公文書公開、琉球大学の我部教授の研究成果、西山太吉氏らの資料公開訴訟の裁判資料、密使なった人の暴露書籍などで「丸裸」に露出されてしまった事実でした。この調査をした筆者は、アメリカの民主主義を担保する仕組みがよく分かりました。

場となったビスタラウンジ（船の中の大講堂）は、空席がないほど多数の人が聴講に来てくれました。

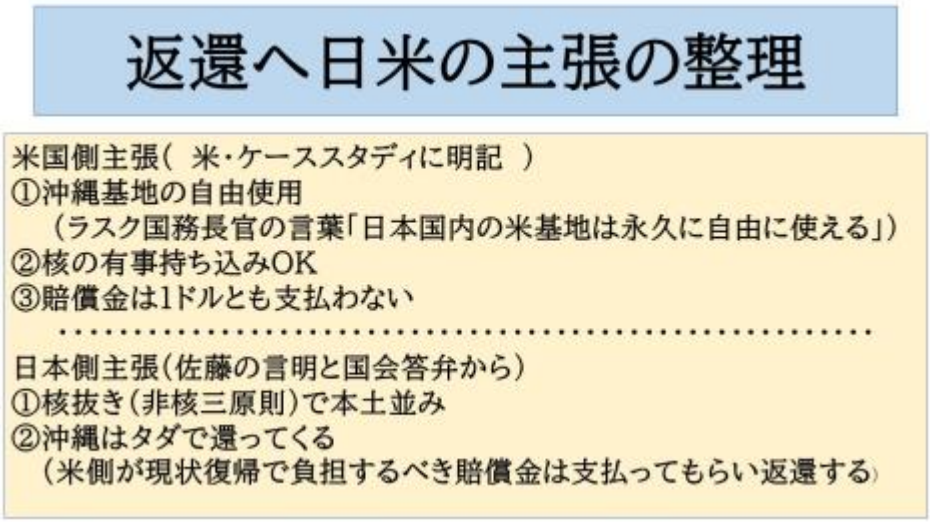
法治国家アメリカの沖縄返還時の体制

アメリカは沖縄返還をするための国家の意思統一をジョンソン大統領時代から始め、ニクソン大統領時には返還条件を決めていました。簡単に言えば「核の有事持ち込み、米軍基地の自由使用、返還時の補償は１ドルとも払わない」でした。日本はこうした国家の政策決定は何もなく佐藤総理が「本土並み、沖縄はタダで還ってくる」という言い方の繰り返しでした。

日米間の返還条件は、ものすごくかけ離れていました。それでも返還になったのは、佐藤が任期中に返還実現を目指したため、アメリカ側の要請にことごとく譲歩し、ともかくも形はどうであれ返還さえ勝ち取ればそれでいいという方針でした。

それが今となっては負の遺産として残されており、米軍基地の永久的施設と自由使用、これに関わるさまざまな不平等条約、思いやり予算の継続です。

驚いたことは、こうした返還交渉でもアメリカは、法に則った手続きを進めており、日本側の特に佐藤総理の弱点をうまくつかんで日本側にすべてを譲歩させた交渉戦略は見事でした。米国の公文書公開でこうした実態がすべて露見してしまったのです。



沖縄返還に臨む日米政府の戦略を見ると、アメリカは国策として一貫した方針があり、交渉術で勝ち取る戦略ですが、日本は政府内がバラバラであり、佐藤の思惑が先行しました。その足下の脆弱性をアメリカは利用したのです。

日本の民主主義は司法が崩壊させている

筆者の前からの主張ですが、三権分離で民主義を担保しているはずの日本で、民主主義は形と言葉になっているだけであり、まったく機能していないことを講演でも語りました。

例えば沖縄返還でも、機密電信文を外務省職員から提供されたとして逮捕された西山太吉毎日新聞記者も、一審・東京地裁では憲法で保障された報道の自由による正当な取材活動として無罪であったものが、二審、最高裁でいずれも逆転有罪にされました。

西山記者
一審無罪から逆転有罪

一審東京地裁（山本卓裁判長）
「憲法で保障された報道の自由の行使。正当な行為であり無罪」
二審・東京高裁「自由な意思決定を不可能にした」懲役4月、執行猶予1年。
最高裁「人格の尊厳を著しく蹂躙した取材方法」上告棄却。二審判決が確定。

他の沖縄返還関連の訴訟でも、一審で原告勝訴となっても二審、最高裁でひっくり返された事例があり、他の重要な行政訴訟でも同じように二審・最高裁で逆転で負けて、国のいいなりになるという事例が余りに多いのです。

行政訴訟は、日本では勝てないというのが通説になっており、国民間には何をやっても変わらない国という諦めが先行し、本来優れた国家として興隆されるはずの国が停滞のままに放置されている現状を主張しました。

沖縄返還交渉は、民主主義崩壊の見本

＊沖縄返還が良かった・悪かった
「あのような方法しかなかった」と言う意見
米公文書公開、当事者の証言、密使の暴露、
総理大臣と秘書官の膨大な日記
すべて何の意味もない。
国民は何を信じたらいいのか。
真実に勝る歴史検証はない。

講演後にさまざまな場所で乗船者と出会う機会があり、皆さんから分かりやすくてよく理解できたという感想をいただきました。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 44

2024/06/27

コロンビアに惹かれたあのころ

バーミューダトライアングルの荒れる海を乗り越えて接岸するコーヒーの名産地コロンビア随一の観光都市カルタヘナ。6 日ぶりの上陸に乗船客はみな期待するお顔であふれていました。

筆者はコロンビア人のことで、一時期、深く取材で関与したことがあり、そのことをしきりに思い出していました。日本列島の人類の「血縁」が、まるで飛び地のようにコロンビアに残っているというのです。見せられたコンビア現地人の写真をみると、日本人そっくり。しかも筆者に解説した人は京都大学医学部の日沼頼夫先生で

した。成人 T 細胞白血病ウイルス（ATLV）の発見者でノーベル生理学医学賞受賞候補者になっていた先生です。

偶然が重なりました。札幌医大医学部病理学教室にいた研究者が、同時期に筆者に ATLV の抗体保有者がコロンビアに多いと言う不可思議な情報をもたらし、日沼先生に伝えたら「そうなんだよ。医学と人類学が交差したんだ」と言うのです。筆者はその続きの話が聴きたくて、京大・日沼研究室にしばらく通いました。

話はこうでした。九州地方や北海道の海岸沿いの居住者に多い ATLV 抗体保有者が、飛び地のように南米コロンビア地域にも多いことが病理学・血清学の研究で分かってきたというのです。それ以外の地域ではほとんど見られない。朝鮮半島・中国にもほぼない。日本人類学会に取材に行ったら、もっとびっくりしたことが発表・討論されていました。

日本列島の南側の海岸線に居住していた人たちが、氷河期の陸続きの時代、北海道から千島列島さらにアリューシャン列島を伝って北米大陸へと広がり、さらに南下して南米大陸へと広がっていったことを推測する世界地図と共に、遺伝子人類学の壮大なスケールの話に話題が広がっていました。コロンビアに否応なく引きつけられていきました。

初めて来た風光明媚なカルタヘナでは、さまざまな思い出がにわかに吹き出した場所でした。

カルタヘナってどこかで聞いたような

PEACE BOAT の旅程を見たときから「カルタヘナ」ってどこかで聞いたよなあという思いがありました。上陸して一日コースのバスで見聞しているときガイドさんに「カルタヘナって有名ですよね」とつまらないことを言うと「そうですよ。ずいぶん前から世界遺産になっています。それから遺伝子の保護もここから始まったのです」という言葉にあっと驚きました。

そうだった、遺伝子組み替えを視野に遺伝子の保全と確保、安全な移送についての「カルタヘナ議定書」は、1999 年の条約特別締約国会議の開催地だったカルタヘナにちなんでつけられた名前だったのです。いまでは遺伝子の健全な保護、発展の世界の基本的なルール確立の論議では、よく出てくる議定書名であり、人の名前だったかなとも思っていました。

ATLV とカルタヘナ議定書。ここに来なければ、生涯二度と思い起こすことがないだろう事実にぶつかり、筆者の感動はいよいよ高まりました。

スペインが作った堅牢な要塞

堅牢な要塞は、半端なものではありませんでした。日本の城も一国の藩主・殿様を守った象徴的建造物ですが、ここの要塞をみるとお城などおもちゃに見えてきました。分厚い岩壁、基礎構造を重視した建造物は、見だけで重厚さが伝わってきます。何に備えたのか。押し寄せる英・仏・オランダなどを原籍とする海賊でした。1741 年には海賊船 186 隻、2600 人が来襲したのですが、カルタヘナ軍は 600 人の勇者で迎撃し、ことごとく打ち破って勝った歴史がありました。

スペインはインカ帝国から奪った金、銀、エメラルドやカカオ、タバコ、香辛料などをスペイン本国へ送り出す港にしたので、難攻不落の要塞が必要だったのです。そして要塞の周辺にはコロニアル風の街並みが広がり、コバルトブルーの海と一年中安定した常夏の地は栄えていったのです。

見るからに堅牢不落の要塞。建造には、アフリカから 30 万人もの黒人奴隷が動員され、酷使されたという暗い歴史も背負っていました。

難攻不落の要塞都市には有り余る富が集まり、ボリバール広場を中心にカテドラルや旧宗教裁判所など、スペイン風の美しい建造物が多数、残っていました。

ガルシア・マルケスに出会った！

突然のバスのガイドで、ガルシア・マルケスの名前を聞いて、またまた興奮しました。1982 年にノーベル文学賞を授与されたコロンビアの作家です。そのころ筆者はノーベル賞の取材で何回もストックホルムを訪れ、文学賞選考委員会のあるスエーデンアカデミーにも数回足を運び、ノーベル賞授与の最終決定の投票は、古風な銅製の蓋付きの壺に投票用紙を入れて決めるという壺を思い出していました。

マルケスが執筆していた住まい、と言っても瀟洒な石作りの建物ですが、バスはあっと言う間に通過してしまい、写真撮影は出来ませんでした。「予告された殺人の記録」、「百年の孤独」などの名作は、このような風土と環境の中で執筆されたのだろうか。マルケスの筆致は、ノンフィクション執筆の基本になるという思いが筆者に芽生え、貪るように読んだことを思い出しました。コロンビアを聞いたときになぜ思い出せなかったのか、我が身の記憶装置の劣化を嘆きました。

マルケスが執筆していたあたりも、写真で見るような歴史的建造物が随所にありました。マルケスは学生時代に首都のボゴダからこの地に転居してきました。勉強

と執筆バイトで忙しかったそうです。コロンビア国立大学法学部のエリート学生だったそうですが、家の都合でカルタヘナ大学へ転校したということでした。

貧富の差があり治安が悪い国

駆け足で見学したコロンビア、カルタヘナ市ですが、治安が悪いことはガイドさんがよく語っていました。かつては麻薬生産・取引で悪名を馳せた国でもありますが、麻薬撃滅は相当に功を奏したようです。しかし貧困と失業などの課題は残されていました。現在、平均月収 400 ドル、消費税 11%、男性は 58 歳定年とのこと。都市部と地方の格差が相当あると言うことでした。

1994 年のサッカー世界選手権でオウンゴールした選手が帰国後、レストランを出た後に口論となり、射殺される悲劇も思い出しました。怖い国という印象を世界中に広げました。

海沿いの瀟洒な風景とそよ風の吹き込むレストランで食べたランチは、日本人好みの海産物、特にエビを主体にしたもので、大変美味しくいただきました。そういえばコロンビアは世界一の美人の産地と聞いてきました。かつてのミスユニバースで何人も栄冠を獲得しています。

写真で見えるバナナの葉で来るんだ中身は、エビを焼いたり揚げたりした美味しい料理でした。写真の上方にある隣席の方の皿の中に見えます。皿の手前にある平たいものは、煎餅のようなパンのようなもので、これも美味しいものでした。

港に戻るバスの中で、もう一つ数奇な思い出が浮かんできました。日本とコロンビアの人類学・医学の共同研究を筆者が提案し、当時の笹川財団（現在の日本財団）に紹介して面倒なその手続きまで準備しました。財団からの助成金が付与されることになり、日本とコロンビアの研究者には大変感謝されました。そのときコロンビア政府から研究チームと一緒にコロンビアへ招待されましたが、社の都合で行けませんでした。新聞記者の身分という遠慮もありました。駐日コロンビア大使が名産のコーヒー豆を持って会いに来てくれたことを思い出しました。

こうしてコロンビアの思い出を書き換えながら、翌日は隣国のパナマに向かって出航しました。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 45

2024/06/29

年中気温 30 度を超える熱帯雨林の国へ

中南米の大西洋・カリブ海と太平洋を隔てている南北アメリカ大陸の細長い陸地の中で、最も狭い地点にいわば穴を開けて船舶の通過を可能にしたのがパナマ運河です。その運河を目指して航海が続いていました。目指すはパナマ運河の玄関口である、パナマ共和国のクリストバルです。

港が近づくにつれて大きな船舶が、海上に点々と列をなして停泊しているのが見えます。巨大なタンカー、コンテナ船、鉱石船などで、いずれもパナマ運河を通過する順番を待っているのです。運河については、後述します。

接岸と当時にすぐに上陸が許可されました。オプショナルツアーに参加して、首都パナマシティへ向かいました。旧市街カスコ・アンティグア地域は、世界遺産に登録されたコロニアル建築のきれいな街並みが続いています。東西に細長い国で、面積は北海道よりやや小さめで、人口は 440 万人。

歴史的にカトリック系の信者が多く、立派なカテドラルが目に付きます。気候は熱帯雨林地帯であり、雨期と乾期が交互に来ます。いまは雨期にあたり、はっきりしない曇り空が続いていました。道路の周辺は深い熱帯の森が続いており、色鮮やかな野鳥が見えます。港のバスターミナル付近は、ちょっとした自然公園になっており、ここには放し飼いなのか、はたまた自然に集まったのか分かりませんが、リスなど小動物やクジャクなどがそこここに姿を見せ、楽しませてくれました。

パナマシティの旧市街地の見学会です

海岸線に沿って椰子並木のある海浜公園が続き、パナマ運河で働いた人のモニュメントがいくつも建っていました。

初めて知ったパナマ運河の構造

旧市街観光の翌日は、早朝から運河を渡る準備が始まり、船内放送でいよいよ運河に入ることが予告されました。運河は海と海の間の陸に、溝のような回路を作り、その回路を船が通過するものと思っていました。ところが、ここまで来て初めて知ったのですが、パナマ運河は船が陸に上がって山を越えていく独特の構造で出来ているすごい運河でした。関心を持って調べることをしなかったので、ここに来て興奮することになります。

グーグルマップによると、パナマ運河の広域図と拡大図は次のようになります。

大西洋と太平洋を結ぶ長さ 80 キロの運河は、難工事を経て 1914 年に開通しました。運河は大西洋側・カリブ海のコロンから太平洋側パナマ市まで続いており、ここを通過するにはほぼ 8 時間かかるというのです。

いよいよ運河に突入です

パナマ運河が近づいてきました。前述したようにパナマ運河が閘門（コウモン、ここでは水門と表記します）と次の水門に閉じ込められて水位を変え、徐々に上に上がって山を越え、そしてまた同じ方法で山を下って向こう側の海に出て行くというものです。

パナマックスという言葉を初めて知りました。

	全長	全幅	喫水
パナマックス	366	49	15.2
PEACE BOAT（パシフィック・ワールド号）	261	32.3	8.1

パナマックススとは、パナマ運河を通過できる船舶の最大サイズを言うものです。PEACE BOAT の「パシフィック・ワールド号」は、そのいずれもパナマックスより

下回っているので通過できるのですが、世の中にはもっと巨大な船舶が多数あることを知って驚きました。

言葉で分かっても、7 万 7 千トンの巨船が、実際にどうやって山を越えるのか。興味津々でした。前方の巨大な水門が徐々に近づいてきますが、全幅 33 メートルもある船が入るような場所ではありません。ところが、船はとても入れないと思っていた隙間を目指してゆっくりと巨船は進み、船を突っ込んだあたりでエンジンを止めました。そこからは運河に沿ってレールが走っており、船をロープで引っ張る動力車がゆっくりと船を引いて水門と水門の間に閉じ込めます。そして頂上にあるガトゥン湖から淡水を入れて水位を上げて持ち上げていくのです。

自分が乗っている船の状況は、自分ではカメラで撮影できないので分かりませんが、多分、遠目にはまさに陸の上に登る船に見えるのではないでしょうか。

運河は、写真のように 2 列の水門回路があります。右側の水門がこれから船が入っていく水門です。手前にぐるりと船上から見学する乗船客が取り巻いています。

船の上は広々としていますが、下に向かって船体は急激に細くなっていくので、写真のような狭く見える水路でも浮かんだ状態で進めるのです。ただし、水路の壁と船の間は、数センチ程度にしか開いていないそうです。すれすれで水路をそろりそろり進んでいきます。

実際に船が徐々に上に行く様子が、周囲の景色を見ていると分かります。「上がってる、上がってる」という声があちこちで飛んでいました。簡単に言えば、洗面器に小さな船を浮かべ、周囲から水を足してやれば船は上昇していきます。あのアルキメデスの原理で船が安定して浮かんでいる状態を利用して、周囲の水かさをあげて船を上にあげるのです。アルキメデスの原理を彼が考えついたのは、お風呂に浸かっているときだと子どものころ習いました。ほんとかなあ・・・。

そんなくだらないことを思い出しているうち、上下 26 メートルもある水位差を水門の構造を利用して 3 か所で上に上げ、頂上部分にあるガトゥン湖に出て航行し、太平洋側の入り口の湖岸に来ると今度は反対に船を下げる水門を利用して太平洋の水位に戻し、広い海に進入していきました。全長 82 キロを渡るのに 8 時間かかりました。まさに巨船が山を越える。これは人間の英知でしょう。

太平洋側に出てみると、こちら側にもパナマ運河を渡って大西洋へ出る船が、多数、海上で待機していました。

上下 26 メートルを水門の構造を利用して 3 か所で上に上げ、頂上部分にある湖を航行して太平洋側の入り口に来ると、今度は反対に船を下げる水門を利用して太平洋に進入していきます。

運河の最終地点に差し掛かると、向こうに大きなアメリカ橋が見えてきます。

この橋を通過すると太平洋へと出ます。

パナマ運河は、スエズ運河をつくったレセップスの手で開発に着手されました。しかし難工事とマラリアの蔓延などで工事は中断され、その後アメリカが水門方式の運河を開発。10 年の歳月をかけて 1914 年に開通しました。マゼラン海峡、ドレーク海峡などを回りこまずにアメリカ大陸の東海岸と西海岸を船舶が行き来できるようになったのです。

2000 年 1 月 1 日から、運河はアメリカからパナマに返還され、その後はパナマ共和国のパナマ運河庁が管理・運営しています。

毎年の運河通航隻数は、13,000 隻から 14,000 隻です。 通航料以外の運河関連収入を含めると、2020 年の総収入は 34 億ドルとなります。しかし液化石油ガス（LPG）の価格上昇を受けて通航料も急上昇を続けているといわれ、かつての

2倍になっているとも聞きました。世界の物価高の影響をもろに受けているようです。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 46

2024/06/30

朝の食卓にのぼった世界一住みよい国

午前6時半、筆者の朝の食事の時間です。5 階の和食レストランに乗船客が三々五々集まり、5, 6 人の食卓が数十ある大きなレストランで朝食が始ります。メンバーは毎日、変わります。先着順にテーブルに座っていくので、さまざまな方々と同席になります。2 か月の船旅ですから、お顔を見ればああ、あの方かなと名前は知らなくても顔見知りになります。

朝の食卓は、昨日の反省会と今日の予定の期待感とで、話題が広がることがほとんどです。大体は話上手なご婦人がリードして話は際限なく広がっていきます。

「今日は世界一幸せな国に上陸するんですよ。ワクワクだわねえ」という発言に、食卓一同、顔を見合わせながら発言したご婦人に釘付けとなりました。聞けば、寄港するコスタリカは、イギリスのシンクタンクの調べで、世界一幸せな国の指標でトップになったというのです。部屋に帰って調べてみると、イギリスの「ニュー・エコノミクス財団」が発表している「地球幸福度指数（Happy Planet Index）」の 2020 年の結果によると、コスタリカは幸福度で世界トップになっていました。

教育費、医療費は基本的に無料。環境政策にも実績を出し、高い教育レベル、高い平均寿命など中南米ではトップにあるようで、これまでもたびたび、この種のラン

キングでトップになった実績もありました。ちなみに日本はと見ても見当たらない。ない、ないと探して 57 位で発見。あったからほっとしました。

軍隊を持たない国

この国を国際的に有名にしたのが軍隊の保有を禁止する憲法を 1949 年に制定したことです。87 年にはその功績などでノーベル平和賞を授与されています。

パナマのすぐ隣の国です。面積は 5 万 1,100 平方キロで九州と四国を合わせたくらいです。人口は 515 万人（2021 年）で、東京都のざっと半分です。カトリック教が国教ですが、憲法で信教の自由を保障しています。現在は雨期ですが、最高気温が 30℃前後、最低気温が 18℃前後で、雨が不規則に降ってきますがまあ、過ごしやすい土地のようです。

バスの車窓から見た熱帯雨林の景色。終日、雨模様であり深い緑の山地は、日本の森とよく似ていました。松の枝のように張り出している樹木もありましたが、よく見るとまったく違う樹木であり、熱帯地方の林相は緑の重層でした。

コスタリカと聞いて、選挙の「コスタリカ方式」を思い出していたので、訪問したら真っ先にそれを聞きたいと思っていました。何だろうか、コスタリカ方式とは。ネットで調べて見たら、びっくりすることが書いてありました。

ホンモノのコスタリカ方式は有権者と議員の癒着を防ぐ制度

小選挙区比例代表並立制の選挙戦術の一つ。同じ政党または友党に競合する候補者が存在する選挙区では、1 人を小選挙区に、もう 1 人を比例区に単独で立候補させ、選挙ごとにこの 2 人を交代させる方式である。

それはなんとなく分かっていましたが、それと国のコスタリカとどんな関係があるのだろうか。ネット解説によると「コスタリカでは、選挙区内有権者と議員との癒着を防ぐ目的で、国会議員の同一選挙区における連続再選を禁じたもの」とありました。なんと崇高な制度ではないでしょうか。

日本の「コスタリカ方式」とは、なんの関係もない立派な政治目的を持ったコスタリカの選挙制度でした。小選挙区比例代表並立制導入当時、森喜朗・自民党幹事長がコスタリカの選挙制度を参考に命名したとありますが、コスタリカの人々には恥ずかしくて言えない命名に呆れてしまいました。

ショッピングセンター内には、世界的に有名なブランド店を始め、多種類の店舗が並んでいました。日本ブランドもありました。ピッカピカで清潔。ゴミの分別もきちんとされており、これまで訪問したどの国よりも清潔感がありました。

船から 2 時間かけて首都のサンホセへ出向きました。車窓から見る景色は深い森に包まれた環境で、この日は終日雨模様でした。道路は、よく整備されており、行き交う車は韓国車が目立ちました。バスから降ろされたのは、どでかくてしゃれたショッピングセンターでした。ここを拠点にあとは自由行動で、勝手に街を散策して、また 2 時間かけて夕方に船に戻るというコースです。

見通しのいいコーヒーショップにゆったりと座って、しばらくこの国の人々を観察することにしました。最初に気が付いたのは、ここはヨーロッパのどこかの国ではないかという錯覚でした。大人も子どもも、男女とも実に整った美形のお顔であり、女性は均整のとれた金髪が多い。思いのほか、ワンちゃんを連れている人が多いことにも気が付きました。

ワンちゃんが次から次とやってきます。どの犬も毛並み鮮やか、よく訓練されており、行き交う人に話しかけられるとちゃんとお行儀良く振る舞います。生活環境の余裕が、ワンちゃんの振る舞いにも出ているようです。

ワンちゃんトリミングのお店は、外からよく見えました。実にお行儀良く毛作りを受けており、ワンちゃんと息の合ったトリマーの見事な手さばきに見とれました。

子ども連れの人も多くいました。子どもたちの服装や仕草・行動を見ていれば、大人や社会の様子も見えてきますが、どの子もいい子に見えます。ふざけあいじゃれ合うのは、どの国の子も共通ですが、お母さんたちの様子を見ていると、実に落ち着いています。雨降りの中でスクールバスを待っている団体にも出くわしましたが、バスが来ると子どもに続いて大人という順番が決まっているのか、実に見事な流れで乗っていました。

世界一幸せな国の一端をいやというほど見せられました。年収、賃金、社会制度、企業環境などから人の幸せ感を測りがちですが、人々の動作・表情を見ているだけで、幸せ感が伝わることを初めて実感しました。

国民が誇りにしている新古典的様式の国立劇場。この建物を守るために戦争をしなかったと言われているそうです。

翌日の朝食テーブルでは、前日見てきたコスタリカの話題になりました。メンバーは全く違っていましたが、意外なことを見聞したご婦人もいました。港の近くの地域には、物乞いがいたし、とても世界一幸せな国ではなかったという報告です。皮膚の色などから原住民の系統らしく、貧富の差、失業率の改善などこの国にも課題があることを知りました。駆け足で見聞したコスタリカですが、訪問した国の中でもいい印象に持った国の一つでした。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 47

2024/07/03

陽気な歓迎と高い物価

中南米3つ目の国・メキシコは、入国審査もないフリーパスの入国でした。太平洋に面したメキシコの重要な貿易都市のマンサニージョ市は、接岸した岸壁から歩いてすぐ、観光都市風の陽気な歓迎の雰囲気になりました。

船を出ていきなり、美男美女の歓迎グループに取り囲まれて記念写真。楽しい国への第一歩という感じでした。

筆者は、風邪気味のため大事を取って出歩くことは避け、お昼からのメキシコ料理ミニレッスンのツアーに参加することにしました。

船内の温度調整には、乗船者がみな不平不満を漏らしており、筆者の船室の温度調整はきかず、レストランはやたら肌寒く、外は暑い夏の季節というのに、船内はクーラーが効きすぎて半袖シャツに何かを羽織っている人がほとんどです。エアコンが効かないようで、診療所に薬をもらいに行ったら、多数の方が列を作っていたのにびっくりでした。

すりつぶすだけのメキシコ料理だが・・・

メキシコ料理は、時たま東京のメキシコ料理専門のレストランに行っていたので、馴染みがあるので期待して参加しました。バスで市場を見物してから景色のいい海岸に面したホテルに到着しました。

各自のテーブルには、トマト・タマネギ・唐辛子の入った石臼が用意されており、早速、料理に取りかかりました。写真で見るように石臼の食材を石の棒で力任せに砕く作業です。

食材を細かく砕くというのですから力仕事です。料理とはほど遠いものでした。
岩塩をパラパラと入れただけでできあがり。

食べてみると超激辛。生の唐辛子を潰して入れているので当たり前ですが、これが思いのほか美味しい。トマトとタマネギ。これを潰して塩味だけ。こんな簡単レシピ初めてでしたが、意外と美味しい。ただ激辛なので、みんなハーハー泣きながら食べていました。筆者は半分、残しました。

続いて出てきたのは、またまた、トマトとタマネギ、そしてアボガド。トマトとタマネギは、今度はナイフで刻んでまぜこぜにしてアボガドを入れるだけ。岩塩パラパラ。これって料理でも何でもないなあなどと思いながらちょっと味見をしみるとこれまた意外と美味しい。

トウモロコシの煎餅のようなものが配布され、そこにこの餡を盛って、上からチーズと生クリームを散らしてかぶり付きました。食べにくいのですが、メキシコ料理は

基本的に手で食べるものですから、ナイフ・フォークは要らない。手づかみでかぶり付く。食べてみるとこれまた美味しい。先ほど激辛で残しておいたものを少々入れてみると、辛みが効いてさらに美味しい。

メキシコのコロナビールを飲みながら、たちまちご機嫌のランチ会となり、なんだかだまされたような思いで両手でかぶりつく、大騒ぎの料理レッスンでした。

日本の円安を知って買い物にも影響

昔、日本円が強かった時代、外国に行ってブランド品を買いあさる日本人観光客は、現地の人からバカにされているような感じでした。筆者は、ヨーロッパで何度か、そのような光景を見て、恥ずかしい思いをしたこともありました。

しかしいま、ご婦人たちの買い物を見ていると、実に手堅いのです。スマホ片手に値札の数字を日本円に換算しては、品定めをしています。「高い？」、「安い？」こんな会話が聞こえてきますが、大体は「高いね」という言葉に落ちついています。日本円が安いので、高く感じるのです。

PEACE BOAT で乗船者に配布しているパンフレットに、諸外国の現地価格と日本の物価を比較する数字があります。ファストフードのハンバーガーを例にして日本と諸外国の価格比べを示していますが、日本のハンバーガーは、半分から 3 分の 2 程度の価格です。

これを逆に外国人から見ると「やす～い」となります。この春、ヨーロッパに出張から帰国した人に聞いた話ですが「帰国してほっとしています。日本は物価が安いし食べ物が美味しい」というのです。その実感が、外国旅行してよく分かりました。アイスランドのコンビニでみた板チョコが 2000 円だったのでぶったまげましたが、現地の価格が高いのではなく、日本円が安過ぎるのです。

現地の豊富な果物類。かつてのような割安感は感じませんでした。

この日の夕飯の食卓でお土産物の値段の話になり、国際通のご婦人が「中南米でこんなに高いお土産物って初めてです」と語っていました。円安になると輸出産業が伸びます。安い日本製製品が外国で売れるからです。

大もうけした製造業が利益を内部留保してきましたが、このところようやく人件費増加に回すようになりました。しかし設備投資による次世代挑戦にはなっていないように筆者は思います。そんなことを考えながらメキシコを後にしてカナダへ向かいました。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 48

2024/07/05

新札発行の肖像が変わった

７月３日、日本のお札の肖像画が変わったことにちなんで、千円札の肖像になった北里柴三郎の物語を船内で講演することになっていました。

旧札を街の両替屋に持っていっても替えてくれないといううわさ話も聞いていま

したが、船はいま太平洋上をアメリカ大陸に沿って北上しており、そんな心配もなく北里が惜しくも第１回ノーベル賞受賞を逃した話をしました。

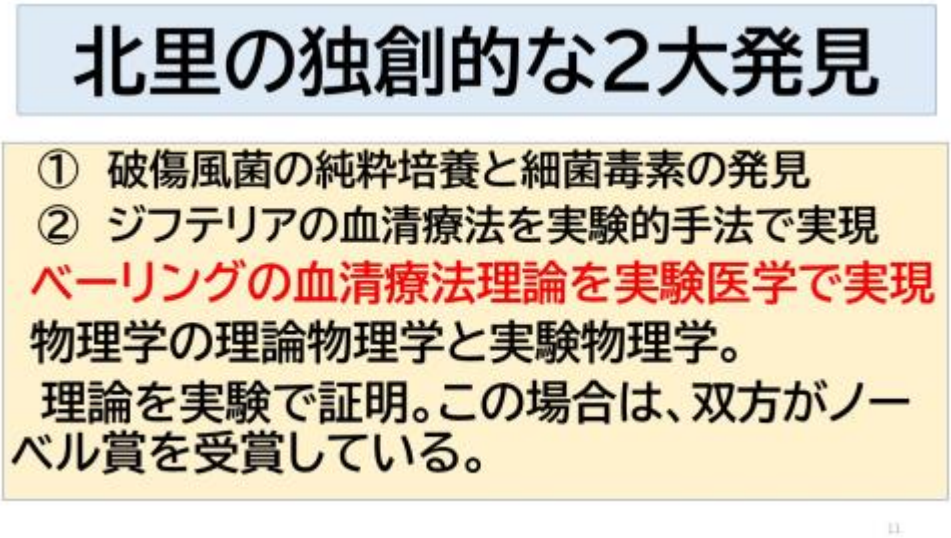
会場には大勢の乗船客が聴きに来てくれました。

筆者がこの話を知ったのは、1988 年の年が明けてすぐでした。京都大学の矢野暢教授がノーベル財団から入手した資料の提供を受け、第１回ノーベル生理学・医学賞の審査内容の詳細を知って度肝を抜かれました。もちろん、日本では何も知らない時代でしたから特報することにして、何日もかけて原稿内容を練りました。

北里の業績は、今でいう免疫療法の基本になったものであり、ワクチン開発への考えにもつながっていった大発見でした。抗原抗体反応の基盤を解き明かしたものでもあり、後年、遺伝子レベルで生体が抗体をつくる仕組みを解き明かした利根川進先生の大発見へとつながっていきます。こうしてみると免疫の基礎的仕組みの歴史的解明には、日本人研究者がものすごい貢献をしてきたことを改めて認識しました。

船がアフリカ大陸のガーナ沖を通過した際に野口英世の伝記を講演しました。彼もまたノーベル賞をほとんどつかみかけていた研究者でしたが、研究に取り組んでいたガーナで斃れた生涯は、日本人の心をつかんで離さないものがありました。

北里と野口。日本の医学研究の基礎を築いた明治時代の 2 人の巨人が、お札の肖像画でバトンタッチするという奇遇に出会い、その 2 人の伝記を異国を巡る船の中で講演するという珍しい体験をしたことを嬉しく思っていました。



北里の燦然と輝くオリジナル研究の業績。今ならベーリングと北里の共同受賞は確実ですが、当時は複数受賞の制度ではなかったので、惜しくも逸したものでした。北里の無念は 115 年後に大村智先生が晴らしてくれました。

ランチをしているテーブルに偶然、同席した年配の女性の方が、北里研究所の研究員だったことをお聞きしてびっくりしました。ご主人も交えて、往時の北里研究所の話になり、大村智先生の業績へと発展して話題は際限なく広がりました。近く大村先生の伝記も講演する予定です。

船内将棋大会は決勝で敗れる

日本将棋連盟の棋士、高田尚平七段の主催する船内最後の将棋大会に出場しました。今回は上級・中級・初級と分かれており、筆者は上級に出場して惜しくも決勝で敗れました。

盤を挟んで女性対局風景があちことで展開され、往時の将棋大会とは全く違った将棋大会の風景でした。

楽しみ・娯楽の一つですから勝敗に関係なく、和やかな雰囲気の大会でしたが、女性「棋士」が本数近くいることに時代の波を感じました。プロの世界でも女流棋士が大活躍する時代です。藤井聡太七冠がフィーバーに火をつけたこともあり、男女を問わず将棋ファンが広がっていることを実感しました。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 49

2024/07/06

世界一周旅行の仕組みを知る

PEACE BOAT は世界一週の旅をうたい文句にしています。確かに豪華客船に乗船し 100 日間ほどかけて世界を一周するようにはなっています。しかし乗船してみてよく分かったことは、各地に寄港して上陸する日数はごく僅かであり、大半は船の中にいることでした。

そんなことは乗る前から分かっていたことだろうと言われると思います。しかし実感として初乗船者には分かりませんでした。乗っているうち気が付いたことは、寄港地で上陸して各種ツアーに参加できることだけではなく、「オーバーランドツアー」と呼ばれる、特別仕立てのツアーが用意されており、それに参加すると、寄港地で上陸すると 1 週間から 10 日くらい、飛行機で移動しながら各地を見物できるツアーがありました。船が先に行って寄港する港へ飛行機で追いかけていって合流し、再び乗船してくるという仕組みです。

申し込んだが満杯で諦めた

PEACE BOAT 乗船申し込みをした後、様々な情報が郵送されてきましたが、乗船するのは先の話だからろくに読みもしないでいました。それが失敗の第一でした。オーバーランドツアーを知って、慌ててネットで申し込んだときには、筆者が希望するコースは人気があるらしく、5 コース申し込んですべて満杯になっていました。諦めずに空席待ちにしておけば、チャンスがあったかもしれません。

参加者に伺ったオーバーランドツアーの醍醐味

最も行ってみたかったのはダーウインのガラパゴスでした。そこへ参加した千葉県出身の田中陽子さん（68）（仮名）は、船内の「ダンスの教室」の友なので、行ってきた話をうかがいました。そのお話と提供された写真を紹介します。

ガラパゴス諸島は、自然を守るために厳しい観光ルールがあり、諸島に上陸する際も人数や時間が制限されていました。小型ボートに分乗して無人島に上陸して自然にどっぷり浸かりました。

イグアスの歓迎、野鳥の楽園

印象に残ったことを次々と話してくれました。まずガラパゴス諸島の中心部にあるサンタ・クルズ島にエクアドルから飛行機で渡りましたが、早速、イグアナ君の歓迎にあいました。あちこちにイグアナがいましたが、どれもこれものんびり寝転んでいる風で、人間のことなど眼中にないようです。

それは諸島に生息する野鳥や他の動物たちにも共通の行動であり、人間は１メートル半内に近づいてはダメというルールがありましたが、その至近距離に行っても逃げも隠れもしない。その自然生息状態に感動したということでした。

色鮮やかなブルーの「下着」と思いきや、青い足を見せて抱卵中の「アオアシカツオドリ」。人間の姿に警戒する様子はなく、野鳥の楽園でした。

イグアナ君は自然溶け込んでおり、思わぬところから顔を出します。餌をやれば食べに来てくれそうですが、それはルール違反。見物する人間と彼らは共通の空間で過ごしていることを実感しました。

島の若者たちと植林活動をする

この島には、他からの移住者は住むことが出来ないそうです。島で生まれ育った人たちが、観光事業を生業にして、自然と共に生活しているということでした。ツアーに参加した 23 人の人たちとたちまち「親戚付き合い」となり、島のコーヒー園

に付属している植物相を見学し、ダーウイン記念館を見聞し、樹木の植林をして大いに楽しみました。

島の若者たちと一緒に植林活動。植林する人は、なにがしかのお金を払って次世代への基金になるような仕組みになっていました。

ガラパゴスといえば、陸上を闊歩するゾウガメです。しかし強い日差しにたまりかねたのか、水浴びする珍しいゾウガメを撮影しました。多くの生物群の食料になっているサボテン。熱帯地方の島の命となっていました。

いったい費用はいくらなの？

オーバーランドツアーの費用は、航海中の費用とは無関係ですべて別途の持ち出しです。ニューヨークから船と分かれ、太平洋のガラパゴス諸島で観光して空路パナマに戻ってきて本船と合流します。8 泊 9 日で 64 万 9 千円。ホテル・食事・交通費すべてです。ガラパゴス諸島には 4 泊しました。

陽子さんは、大手企業に定年まで勤務してリタイア後は、好きな旅行を楽しんでいるとのことです。PEACE　BOAT には今回、3 回目の乗船であり、うまくオーバーランドツアーにも参加できた嬉しさが伝わってきました。

さらばガラパゴス。野鳥の楽園にも別れを告げ、何度も振り返りながら帰途につきました。

「たくさんの写真を撮ってきました。孫たちに大自然に生きている動植物の命と地球の命の尊さを話し、聞かせたいと思っています」

船内では、あっちでもこっちでも、そんな話が広がっています。共に楽しむ旅のひとコマであり、これもまた船旅の風景にもなっています。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 50

2024/07/11

オーバーランドツアーの興奮を再び知る

船旅も終盤に入ってきました。船内で行き交う人のお顔もほぼ知るようになり、お名前は分からないまでも、多くの方と目線で挨拶をするようになってきました。7階の中央ロビーのソファでゆったりと座っているとき声を掛けられました。西川（さいかわ）孝純さん（76）という方で、名刺をいただきびっくりしました。元共同通信社論説委員長を務めた方で、日常的に競い合うメディア関係者として健筆を振るっていた方と分かり、いわば同業者のよしみで様々な話題で話は弾みました。

リビングストンが発見したヴィクトリアの瀑布を見てきた

５月８日に南アフリカ（南ア）に寄港した際に３泊４日のオーバーランドツアーに参加して、世界三大瀑布の一つ、ヴィクトリア瀑布を見てきたというのです。しかも筆者が南アのサファリ公園で見た野生動物たちとはスケールが違う動物群の写真も見せられました。

筆者はヴィクトリア瀑布を是非とも見たかったのですが、オーバーランドツアーに申し込んだときはすでに定員満杯であり諦めていました。しかし西川さんはキャンセル待ちに登録していたので、出発数日前に船の中でアキが出たと報告を受けて勇躍参加したということでした。

筆者が少年時代「おもしろブック」という少年雑誌があり、巻頭に様々なカラーの絵巻を入れて大人気でした。その絵巻の中にイギリスのデイヴィット・リビングストンがアフリカ探検中にこの瀑布を発見し、ヴィクリトア女王の名前を瀑布につけたのです。

毎月連載されたリビングストンのアフリカ探検記事を夢中になって読み、今でもリビングストンが瀑布を目撃した光景の見開きの絵が記憶に残っています。

西川さんの撮影した数々の写真を見せられながら、アフリカ奥地で水煙と轟音を上げて爆流する瀑布を想像しては、行けなかったことに情けない思いをしました。

最大落差 108 メートル、轟音と共に滑り落ちる膨大な水量に、西川さんは度肝を抜かされたようです。「日光の華厳の滝を横に数十本並べたような迫力を感じました」とも語っていました。

ヴィクトリア瀑布をバックに金婚式記念写真です。こんな写真を見せられて、筆者は西川さんと同い年の奥様・治代さんご夫妻と一緒に行きたかったとの思いが募りました。キャンセル待ちをしておけば良かったと悔やみました。

雄大なサファリ公園もスケールが大きかった

瀑布に行く途中に国立公園のサファリを見学しました。ゾウ、キリン、カバなどアフリカ大陸に生息する大型動物の写真は、筆者が南アのサファリで見てきたものと大分、スケールが違っていました。

公園内を探検車でゆっくりと巡回しているとき、数メートル先のブッシュの中からゾウがぬっと出てきて驚いた瞬間もちゃんと撮影していました。

数メートル先のブッシュからぬっと現れたアフリカゾウにはたまげたそうです。車上から静かに観察していると、ゾウは何事もなかったように去って行きました。

カバの昼寝。餌は陸上の地べたに生えている草だけ食べているようです。草を食むときは、ひたすら地面を見ているだけですが、耳は発達しているので周囲の動きは音だけで判断し、しかも敏感だと言うことです。

ゾウの水浴び。カバがいた水辺には、多くの動物と野鳥が群がり、動物天国でした。

キリンは遠くからでも目立つ動物です。ライオンなど肉食獣に襲われることもあるので、高い目線で監視しているようです。

金婚式と喜寿の前倒しのお祝い

西川さんはリタイアして世界一周を思いつき、PEACE BOAT に乗船しました。政治部の記者時代、癌を告知され、リンパ節腫大の摘出手術を受けましたが、これを乗り越えた時期もありました。ご夫妻の金婚式がちょうど航海中にぶつかるので、そのお祝いもかねて乗船しました。金婚式当日の 5 月 17 日には、船のレストランでお祝い会をしていただき、シャンペーンを抜いて楽しんだそうです。ご夫妻はそろってことし 76 歳ですから、数えは 77 歳の喜寿です。祝い事は前倒しでやりますから、西川さんご夫妻の金婚式と喜寿は二重のお祝いだったのです。

さて、費用のことですが、オーバーランドツアーはお一人 60 万円ということで、ご夫妻で 120 万円でした。しかしそのコストに見合う光景を目蓋に焼き付け、楽しい旅の体験を身体に染みこませてきたことが、筆者との会話からにじみ出ていました。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 51

2024/07/12

メキシコから 1 週間かけてカナダのバンクーバーに接岸

人口約 250 万人のバンクーバーの港に着くと、ノルウェーとアメリカからの豪華客船 2 隻が先着で接岸しており、港周辺は上陸してきた観光客であふれかえっていました。人並みを整理していた女性に「どのくらいの人が上陸しているのか」と聞いても、首をかしげ、両手を広げるだけ。「大体、3000 人かな」とつぶやくように言いました。

筆者は、その昔、バンクーバーには何度も来ていますが、その当時はこれほど観光客が押しかけていませんでした。その話は最後に触れたいと思います。

30 年ぶりに降り立ったバンクーバー。背後にある船はノルウェーの客船で、NY でも一緒でした。

スタンレーパークでロープウエイに乗る

ツアーに参加すると、船からほどない距離のスタンレーパークに連れて行かれました。バンクーバー湾に面し鬱蒼とした森に囲まれた広大な公園です。バンクーバーは、豊富な森で生産される製材業と観光が主たる産業です。移動する大型バスも清潔でよく整備されていました。

このツアーの目玉は、パークからグラス・マウンテンの山頂に行く大型ゴンドラからの見物でした。山頂まで約 10 分の間、眼前に広がるパノラマは、遠くに広がるバンクーバー湾を臨んで、息を呑むような素晴らしい景観でした。

写真のような大型ゴンドラで山頂へ。山頂からの景観は素晴らしいの一語でした。

写真で撮影して見ても、実際の景観にはとうてい及びません。何事も実物に勝るものなしということでしょうか。山頂の景観を見ながら、配布されたランチボックスを広げて、しばし参加した乗船者らと歓談しました。

サケをシンボルとした環境運動

筆者は、40 年ほど前にアメリカとカナダの行政マン、メディア関係者らと一緒になってサケをシンボルとした国際的な環境運動を展開したことがありました。サケは海から川に遡上し産卵して子孫をつないでいきます。日米加いずれも同じ習性であり、しかもサケが育つ海は北太平洋であり、共通の海で成長したサケたちが、3 年後には生まれ故郷に向かってそれぞれの国に帰っていくというドラマチックな話で盛り上がっていました。

元々は、ロンドンのテムズ河が大西洋のサケの習性を利用して、汚濁したテムズ河の浄化キャンペーンにサケが再び遡上する河に戻そうという運動を展開したことを受けて始めたもので、日米加英の 4 カ国で同時期に始めた、地球規模の珍しい環境運動でした。

そんなことを思い出しながら、木こりが演じる木材切り競争などのアトラクションを見物したりしていうち、あっという間に帰途につく時間になりましたが、少々、時間に余裕があるので、港周辺の街に探索に出てみました。

原住民文化の木彫りの作品が、至る所で見かけました。宗教的な意味は薄く、表札代わりに建てていたと聞いたことがあります。

手頃なビアホールを見つけたので、生ビールとサンドイッチを注文して街行く人の観察を始めました。バンクーバーの途上を走る乗用車の多くが昼間からライトをつけています。後でガイドさんに聞いたら、昼間でもライトをつけていると事故が少ないデータがあるので、最近はエンジンを入れただけで昼夜問わず自動的にライトがつく車になっているとのことでした。

また、横断歩道では赤信号を無視して渡っていくジェイル・ウオーキング（jail walking,

刑務所に行くような違法な横断）意外と多いことに気が付きました。これも地元の方に聞いたところ認めていました。日本人は、車が来なくても信号が変わるまできちっと守っています。日本人の美徳ではないかと思いました。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 52

2024/07/13

アラスカのケチカン(Ketchikan)に上陸

バンクーバーを離陸し中1日置いてアメリカ・アラスカ州の最南端の港町のケチカン町に寄港しました。

人口は8千人余、先住民族はサケ漁で暮らしていましたが、1887年に白人が入植してから急速に発展してきました。当初はサケの缶詰工場が主産業でしたが、金鉱山が発見されてからゴールドラッシュの時代もあり、いまはサケ漁の本拠地であり風光明媚な景観を売り物にした観光都市として栄えています。

通常、船が接岸するとその地を見学するツアーが計画されますが今回はツアーはないため、乗船客は一斉に上陸してそれぞれの思いで、街に繰り出しました。筆者は同乗者の提案で「木こりショー」を見学に行きました。

木こりがアメリカ・カナダチームと二手に分かれて、木を切ったり、丸太乗りで相手を蹴落としたり、木登り競争をする対抗戦です。観客がアメリカ・カナダびいきの二手分かれ、声援合戦を繰り広げるというアトラクションショーです。会場を揺るがすような大声援と歓声で沸き立ち、一緒になって楽しみました。

木こりが演じるアトラクションは、観客席を巻き込んで楽しい対抗戦でした。

木登り競争もあり、大声援の中で競演していました。

かつてはゴールドラッシュで沸いた町という名残りなのか、多数の宝石・装飾類を販売するきれいな店舗が目につきました。一応、見学を兼ねて入りましたが、筆者には宝石を鑑定したり鑑賞する眼もなく、値段を見せられては驚くばかりの高価なものばかりでした。

指輪、ネックレス、イヤリングなど、おびただしい商品が陳列されていますが、それにも値札はなく、買うふりをして値段を聞いてみると、大きめの電卓に数字を入れて見せます。ドル建ての値段ですから頭の中で計算すると、眼が飛び出すような高価なものばかりです。

観光地だけに商店街は半分が宝石類販売の店舗でした。かつてのゴールドラッシュを思い出させましたが、値段の感覚が分からないので、お買い得なのかどうかさっぱり分からない値段ばかりでした。

試しに電卓を取り上げて、示された数字の半値を入れてみたら、相手は「冗談ではない」と眼を丸くして大げさな仕草で返し、こちらと電卓の数字を交互に入れ合

い、最初の値段の 7 掛けくらいまでまけてきました。こんな光景があちこちで展開されており、買わなくても大変友好的であり、楽しませてくれました。

ランチはご当地の名物、キングサーモンとカニにしました。どちらも大変美味でしたが、値段はやはり割高感であり、それでもビールを飲みながら乗船仲間と外の景観を楽しみ、アラスカへの8時間の上陸を満喫しました。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 53

2024/07/14

アラスカ湾に浮かぶおびただしい氷塊を見る

アラスカ州の最南端のケチカン接岸の翌日、さらに北行への航海が始まりました。次の寄港地はスワードで、この世界一周の航海の最後の接岸になります。船内では

各種のイベント、趣味・道楽の集まり、文化・芸能活動、社交ダンス、楽器活動などの発表会が目白押しであり、船内はなんとなく慌ただしい雰囲気になっています。

船はアメリカ大陸の北側の入り組んだ沿岸の地形を見ながら北上していますが、長い歳月をかけて岩盤を鋭く削りとってつくったフィヨルド海岸と氷河から崩れ落ちてきた氷塊を見せるため、入り江に入って行きました。

船の 7 階デッキで氷河をバックに撮影しました。氷河と落下した氷塊は綺麗なブルーに染まっており、雄大な景観に見とれました。この日は、大村智先生のノーベル賞物語を講演する直前、突然、氷河が見られるという情報でデッキに出てきました。スーツ姿で写っているのはそのためです。

陸を見ると岩盤だけの山と樹木の繁茂する山とに分かれて見えますが、山と山の間を縫うように引いて落ちる滝のような流れがあちこちに見えます。氷河が見えてきました。船内放送で簡単な説明があり、船はしばらく氷河の見える地点で停船して見物する時間を作ってくれました。

氷河から崩れ落ちてきたおびただしい氷塊が、入り江からアラスカ湾へと出て行きます。地球温暖化が原因で氷河の崩壊が続いているということです。

長い歳月をかけて氷河から削りとられた岩石の山は、見るからにゴツゴツした鋭い岩石に見えます。まだ植物はほとんど生えていませんが、いずれ緑の山に変革していくでしょう。何年かかるのか分かりませんが、地球規模の歴史とは、想像を絶するものであることを実感しました。

会場には、おびただしい氷塊が浮いて流れていきます。中には岩盤をつけた氷塊も浮いており、陽光の具合で青く澄んだ色の氷塊も見えます。

クジラを目撃した幸運者がいた

氷塊がぷかぷか浮かぶ北洋の海にクジラが回遊しており、乗船者の何人かはその様子を目撃していました。数頭の群れも見た人がおり、写真撮影はなかなか難しかったようですが、地球上最大の哺乳動物の実物を目撃できるのは、やはり感動するようです。

船が沖合に出ると次第に波が高くなり、本航海最大の揺れを感じています。

大村智先生の講演を行う

氷河を船上から見物した後、大村智先生のノーベル賞物語を講演しました。千円札に登場した北里柴三郎の伝記の講演の続きにあたるもので、北里がノーベル賞を逸してから 115 年目にその無念を果たした大村先生の業績を語りました。

氷河を見物した後に講演会に参加した人も大勢いました。講演後に、大村先生の生き方と研究業績を初めて理解したという方がほとんどであり、先生の受賞から 10 年経ってしまうと、記憶から薄れてしまうことを感じました。研究業績だけでなく、人材育成でもすごい実績を残した生き方に、感銘を受けたようでした。

船での講演活動も残り 1 つとなりました。最後は「どうする日本　劣化し続ける国家と組織」のタイトルで締めくくります。チラシを作って配布していますが、多くの方から「是非、聞きたい」という期待の声をいただき、やや緊張して資料作りに取り組んでいます。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 54

2024/07/18

崩れるハーバード氷河を見る

船はアラスカのプリンスウイリアム湾内をクルーズしながら、次々と出てくる氷河を見せるため、停船しながら写真撮影のチャンスを作ってくれました。

湾内に注ぐ氷河には、ハーバード、エール、コロンビアなどアメリカ東部の名門大学の名前がつけられており、この日はハーバード氷河を眼前で観察する機会がありました。

氷河から落下してきたおびただしい氷塊が、海上を帯のように流れる光景は壮観でした。

ハーバード氷河を見学するため、船はしばらく停船して写真撮影の機会を作ってくれました。氷河崩れ落ちる瞬間を見せようという試みです。崩れる直前の氷河です。

湾内にはおびただしい氷塊が流れています。岩石や土をこびりつかせた氷塊もあり、いかにもいま氷河から崩れてきたと言わんばかりの印象です。

14 階のレストランに詰めかけてきた乗船客の間から「あ、あ、あーー！」というどよめきが、上がりました。目前のハーバード運河の一角が崩れてきた瞬間です。白い雪煙をあげて崩れ落ちるその瞬間を筆者も目撃できたのですが、カメラで捉えることは出来ませんでした。

ところが一緒にデッキで観察していたご婦人が見事にその瞬間を撮影しました。快く提供していただいたのでアップします。その方はたまたま、筆者のオカリナの師匠である徳江裕先生（元小学校校長先生）の奥様の春美様と分かり、その奇遇に驚き大喜びした瞬間でもありました。

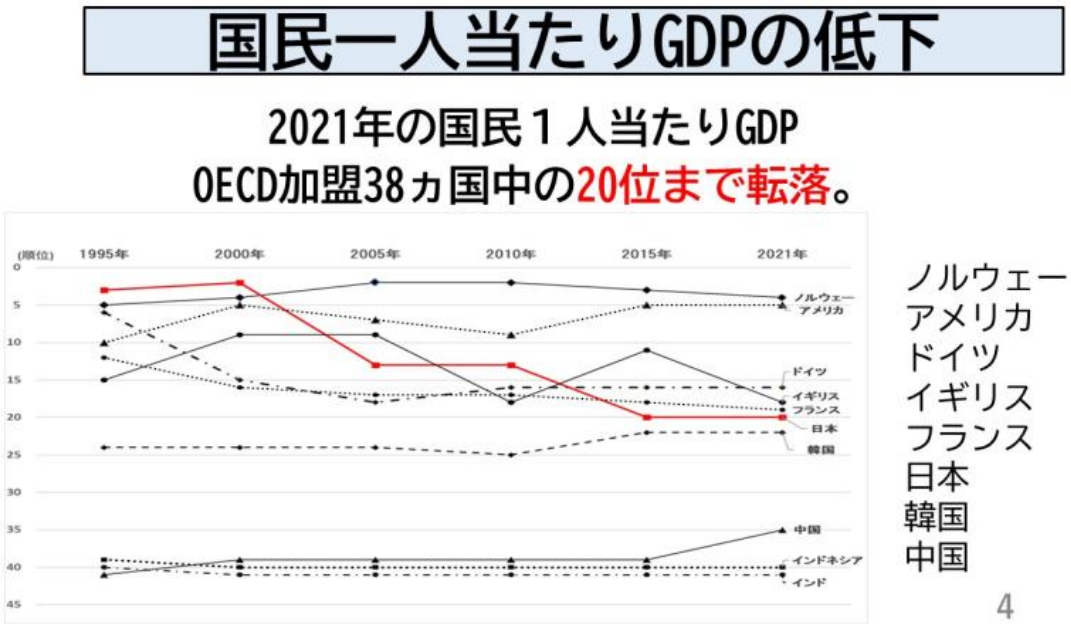
崩れ落ちる氷河の光景を見事、撮影したビデオは、ブログでアップが出来ないため Facebook にアップしました。そちらで見てもらえると嬉しいです。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 55

2024/07/18

劣化し続ける国家と組織を講演

PEACE BOAT の自主企画講演会は、今回が 9 回目となり、最後になりました。この講演テーマは、構想研究会でもたびたび筆者が強調してきた日本の国家と組織の劣化です。立法・行政・司法はもとより企業や様々な組織も劣化していると感じてきました。



PEACE BOAT に乗船してから、様々な乗船客とこのテーマで話をする機会がありましたが、例外なく皆さんは同じ意見でした。「日本は確実に劣化している」。

そこで最後に、このテーマで講演することになり、会場には 200 人以上の方が来てくれて熱心に聞いていただきました。

GDPだけではない
平均賃金は28年間も横バイ

	1992年 平均賃金($)	2020年 平均賃金($)	(2020年)÷(1992年) %
アメリカ	48,389	69,392	143.4
ドイツ	42,562	53,745	126.2
日本	37,483	38,515	102.7
フランス	35,577	45,581	128, 1
イギリス	33,306	47,147	141.5
韓国	23,796	41,960	176.3

7

国際的なデータから見た国家の劣化

GDP やイノベーション競争力、教育への投資、科学技術投資など主なテーマで国際的な比較を見ると、この 25 年間、日本は着実に下降線をたどっています。特に安倍内閣から以降は下降線の一途です。さらに近年の円安は、直近でやや円高に振れているもののトレンドでは今後も円安に推移すると筆者は推量しています。

円安4つの問題点

1. 企業収益が増えても実質賃金が下がる。
   国内消費は冷え込む。
2. 大企業と中小零細、大都市圏と地方の格差が拡大
3. 世界経済の動向次第で経済は動く。
   円安のメリットだけで日本経済の動向を語れない。
4. 労働率分配から、トルクダウン(富めるものが富むと貧しいものにも富が分配される)はあり得ない

「東洋経済」(2016年5月31日)などから作成

8

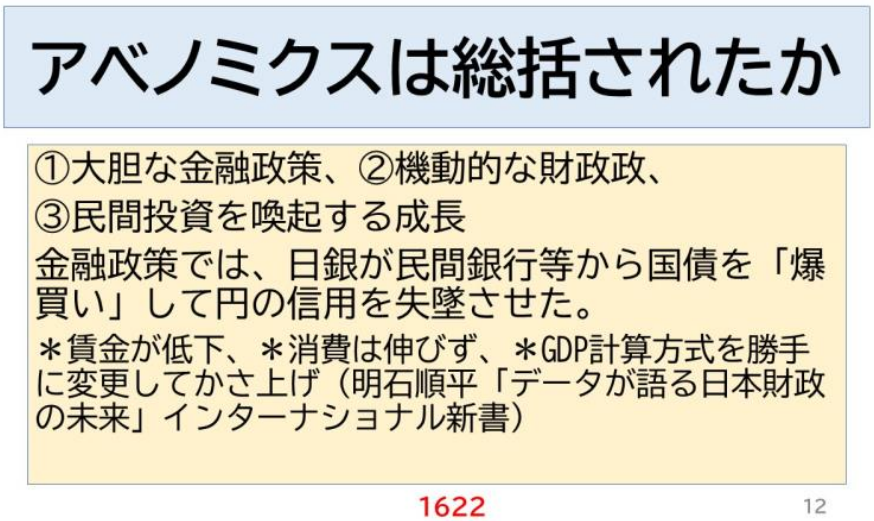
なぜ、こうなったのか。円安が企業の決算に好結果をもたらし、空前の企業収益黒字を計上しています。製造業で持っている国が、円安で儲かっています。儲かったカネは内部留保で備蓄しています。その内部留保額は、日本の国家の予算のなんと２年分と推測されています。

国家の財政は借金だらけで、後生にこのツケを回しています。国家はさびれ、企業だけ潤っている。このような現状を国民はどう理解すればいいのか。

アベノミクスを総括できない

安倍政権以来の劣化は、様々な数字で明らかです。ひところアベノミクスという経済政策で期待感を抱かせましたが、当時から疑問視する経済学者やそれを報道する経済誌がありました。失敗だったという講演を構想研でもしていただきました。

しかしその総括がきちんとされていません。日本は、歴史的な事実をしっかりと残し、その教訓を学ぼうとしていません。沖縄返還の密使密約外交が典型的であり、アメリカの公文書公開、日本の密使になった学者の暴露本、それを裏付けるアメリカの数々の文書などがあっても、国家としては未だに密約はなかったということにしています。国民はもっと真摯に歴史と政治に向き合わなければなりません。



教育現場の劣化は、構想研創設 25 周年記念シンポジウムでも取り上げました。安西祐一郎先生は、「1000 人の海外留学生計画、5 年間で 1500 億円」という衝撃的な提言を発表しましたが、これも講演後の聴者からの感想の中で、共鳴者が多数いました。

かけ声だけのイノベーション政策

ユニコーン（株の時価総額が10億ドル以上、設立10年以内の非上場のベンチャー企業）数
　2023年世界全体1,215、アメリカ656、中国178、インド、英国、独、仏、韓国など
　より下位の17位。
・ハイテク貿易の医薬品、電子機器、航空宇宙分野の貿易状況。かって第２位。
今は中国、ドイツ、韓国に抜かれ第５位。
・特許出願件数
　中国、米国に引き離され、韓国に追いつかれつつある。

順位	国名	企業数
1	アメリカ	656
2	中国	178
3	インド	70
4	英国	51
5	ドイツ	29
6	フランス	25
7	イスラエル	24
8	カナダ	21
9	ブラジル	16
10	シンガポール	14
11	韓国	14
12	オーストラリ	8
13	メキシコ	8
14	インドネシア	7
〃	オランダ	7
〃	スウェーデン	7
17	アイルランド	6
〃	日本	6
〃	スイス	6

31

また、一人一票になっていない現実をアメリカ、イギリス、フランス、ドイツなどと比較したデータをしめしました、日本を除いてはすべて一人一票になっていますが、日本だけ、少数の得票率で多数の議員を獲得しているいびつな状況を示しました。これにも多くの共鳴者がいました。

日本は非人口比例選挙
半分以下の得票率で過半数の議員が当選

ドイツ	49.78%が50.1%の議員を選出、人口比例選挙
英国連邦	49.998%が過半数の326人を選出、人口比例選挙
フランス	議会議員選挙は人口比例選挙。 大統領選は1位58%、2位42%　人口比例選挙
アメリカ	State議会議員選挙（小選挙区）人口比例選挙 連邦議会議員選挙（小選挙区）人口比例選挙
日本	2021年衆院選（非人口比例選挙） 自公得票率47%が63%の議席を獲得 2022年参院選挙（非人口比例選挙） 自公得票率46%が59%の議席を獲得

40

司法の劣化は、たびたび筆者が公言してきましたが、特に行政訴訟ではまず勝てない現実。裁判所は国会と行政に寄り添う判決を出して、本来の役割を放棄している現実を語りました。

負のスパイラルからの脱却

＊政治・行政・司法に対し、本音で語る国民意識
＊本音の言動ができる女性の社会進出
＊正しい民主主義の教育
＊選挙制度の大改革（都道府県別を改革しブロック別で人口比例選挙が出来る）

45

押し寄せる技術革新の波を
乗り越えられるか

2045年問題
シンギュラリティ（Singularity）問題とも言われる
人間を上回る人工知能・知性が誕生する
（レイ・カーツワイル博士の予言）
機械学習、検証力などを世の中でどのように活かすか。そのとき日本はどうするのか

この講演内容は、いずれもう一度、構想研究会などで行って、劣化に歯止めをかける国民的な運動につなげたいと思っています。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 56

2024/07/19

アラスカ・スワードへ最後の上陸

PEACE BOAT の船旅の最後の寄港地はアラスカのスワードという小さな港町でした。この船旅で寄港した都市は、ここを含めて 20 都市でした。南アフリカのポートエリザベス、イギリスのティルベリー、ニューヨーク、パナマのクリストバルは 2 日間の接岸でしたが、残りの 16 都市はすべて 1 日だけの寄港地でした。

スワードは、アラスカ山脈を背後に控えた港町で人口は 3 千人。アラスカ鉄道の終着駅になっており、夏から秋にかけては観光客で賑わう町です。夏と言っても上陸した日は、濃い霧に包まれ、時折、雨が振る寒い日でした。

完全防寒スタイルで上陸しました。この時期、酷暑の日本では考えられない服装です。地球の大きさを知りました。

過酷な自然の中で生きる動物たち

鬱蒼とした針葉樹林帯とそれをまとった山々ですが、冬になれば雪と氷に覆われ、短い夏の期間でもこの日の天候のように肌寒く、霧や雨模様の日が多いようです。寒帯地帯の植物が濃い緑の重層の山並みをつくっており、際限なく自然景観が広がっています。雄大という言葉では表現できないような圧倒的な植物と山の中では、多くの動物たちが生息しており、野生動物保護センターを見学するツアーに参加しました。

アラスカの過酷な自然環境の中でも様々な動物たちが生息しており、それを保護する活動も知りました。和名は分かりませんが、長毛に覆われたバイソン、バカでかい角を持った大型のシカ、その他にもクマ、オオカミなどもオリの中に見えました。

保護センターの名の通り、何かの事情で保護された動物たちを保護し、健常になったらまた自然界へ戻すという活動のようですが、広い土地で飼育されている種類別の動物公園のようでした。

体毛の濃いアラスカバイソン、身の丈 3 メートルはありそうなクマ、オオツノジカなどがのんびりと草を食んでいましたが、見物するこちらはセーターと厚手のコートかジャンパーを着込み、フードをかぶって縮こまりながらの見物でした。

山頂に立っても霧で何も見えず

標高約 2 千メートルの山までケーブルカーがあり、山頂まで行ってみました。しかし濃い霧の中ではぼんやりした山の景色が見えるだけで、お土産屋をのぞいてから早々に退散して麓のロッジへと帰ってきました。

ケーブルカーで山頂まで上りましたが、深い霧に覆われてほぼ何も見えず、寒さだけ身にしみるので早々に麓へ戻ってきました。

ここで出されたランチは、照り焼きにしたキングサーモンが美味しくて評判でした。あとは中華風の料理をバイキング方式でいただきましたが、滞在時間中は Wi-Fi 接続で写真やビデオなどデータ量の多いものを処理する作業に精を出しました。最後の寄港地でしたが見学する場所もなく、長い船旅の最後を飾るにしては暇つぶしの時間で費やするというさえない一日でした。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 57

2024/07/22

空き家を改装してびっくりさせた中日ご夫妻

船には中国、韓国、台湾、シンガポール、インドネシアなど多彩な国籍の方が乗船しています。その中でもユニークな日中友好活動をしている中国人と日本人のご夫婦に出会い、それをどうしても報告したくなってアップすることにしました。

陸建洛さん（右端）と裕子さんから取材しました。

ご夫妻は同い年の 68 歳で上海市出身の陸建洛さんと西宮市出身の濱田裕子さんです。陸さんは、香港と中国の合弁大手港湾管理運営会社の技術スーパーバイザーを務めた方で、奥様は神戸市外国語大学中国語学科を卒業後、通訳翻訳業に入り、全国通訳案内士の資格を持っています。

2 人は 1995 年に結婚し、上海と西宮を拠点に日中間を往復しながら、日中の文化交流で精力的に活動しています。その延長線上でやっているのが、趣味の空き

家改装です。完成した「新築空き家」をギャラリーや憩いの場として人々に無料で開放することで社会貢献にもなっています。PEACE　BOAT 乗船をきっかけに、憩いの場を「ピース　ホーム」と名付け、さらに交流の輪を広げています。

朽ち果てたモデルハウスを新品同様にする

1970 年代に阪急不動産のモデルハウスとして売り出した欧風 3 階建て、1 階コンクリート、2, 3 階鉄骨構造の瀟洒な邸宅がありました。しかし家主が売りに出したときは、20 年以上も使用していなかったのか家全体が朽ち果て、誰も買い手がなく 2022 年 12 月、陸さんが 480 万円で買い取りました。

買い取った邸宅は、見るも無惨に朽ち果て、屋敷も荒れ放題になっていました。

部屋の中もこのような状態でした。

陸さんは、農業と港湾労働者をしながら独学で様々な技術を学び、1991 年の第 2 回世界青年発明コンクールで金賞を授与されるほどの才能のある方です。つまりモノの成り立ちを考えたり、構造を調べるのが得意であり生来、創造性に富んだ器用な方なのです。

元通りの瀟洒な邸宅にするために専門業 4 社に見積もりを依頼しましたが、どの会社も改修は不可能と言ってきました。最大の問題は急勾配の屋根にありました。

そこで陸さんは、自分で元通りに改修することを決心し、まず朽ち果てた家・屋敷の後片付けを始めました。可燃ゴミだけで 45L のゴミ袋が 1500 個以上、粗大ゴミは 2tトラックに冷蔵庫 4 台、洗濯機 3 台、エアコン 4 台などを積み込み、ゴミ処理場に運びました。

一番苦労したのが、業者も尻込みした急勾配の屋根の修復でした。ハシゴを３つつないで作業場にのぼり、命綱をつけ、滑り止めの靴をはき、急勾配の屋根の修復に１人で取りかかりました。家の中の廊下、壁、天井、引き戸、襖、障子などは、ネットのオークションでできるだけ元のものと同じような材質を見つけて購入して取り付けていきました。

あの朽ち果てた邸宅が、このように生まれ変わりました。

室内もこの通りピッカピカになりました。

1 年かかって新築同様に改修完成

途中で上海に行ったりして留守にしましたが、前後合わせると正味ほぼ 1 年間で 8 室の改修を完成させました。周辺の民家に迷惑がかからないように電気工具類は一切使わず、手作業でやり遂げましたが、元の家主が見に来たときは、腰を抜かさんばかりに驚いていたそうです。筆者は数々の写真を見せられただけでも腰を抜かしました。

少子高齢化社会を迎えて、日本ではいま全国で約 20%の住宅が空き家状態です。これを安く買ってリニューアルすれば、自分の持ち家として活用できるし再販すればビジネスにもなります。陸さんは、いまの時代は空き家再生がビジネスになるチャンスであることを社会に訴えていくと言います。

日中草の根美術・芸術交流でも実績

陸さんの活動の本体は、中国友好のための書画、芸術品の展示会などのイベント活動です。先の改修した邸宅を公開して展示コーナーとして使用したり、宿泊施設としても利用しています。陸さんが長年集めてきた中国の絵画、書道などの作品は数千点にのぼり、それを展示したり、ご夫婦で各種のイベントなどにも積極的に参加して日中の芸術交流を通じたイメージ向上に取り組んできました。

中国の書画展は定期的に開催し、広く知られるようになっていきました。こうした活動が注目を集めて新聞・雑誌で紹介されたり、神戸港開港 140 年記念イベントに招待されて展覧会を開催しました。中国のイベントでも紹介され、「地球の歩き方」にも掲載されるなど、いまや有名人になっています。

陸さんは何でも独学で学ぶことが好きで、上海の独学キャンペーンでは、10 年連続個人優秀賞を授与され、また「上海独学者の星　ベストテン」にも選出されまし

た。裕子さんも、中国語に堪能な才能を活かしながら日中文化交流を展開しており、ご夫妻のユニークな活動はますます広がっていくでしょう。

1991年世界青年发明特别金奖
（1991年青年発明コンクールで特別金賞）

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 58

2024/07/23

濃霧と時化と強風で荒れるアリューシャン列島の海

船は一路横浜を目指して毎日、南西へ向かっています。アリューシャン列島から千島列島沿いに航海していますが、海上はほぼ終日霧に包まれており、島影は見えず海は時化ています。船の屋上の甲板に出ると冷たい風が容赦なく吹いており、

冬支度でないと１分といられない過酷な環境です。夕食の食卓が賑やかになっているとき、同席している共同通信社元論説委員長の西川孝純さんが「5 分間講話をしましょう。アッツ島とキスカ島のことです」と発言しました。

濃霧に包まれた海は終日時化ており、アリューシャン列島の島影を見ることは出来ませんでした。終日、大揺れの航海が続き、北方海域の過酷な海の環境を体験しました。

玉砕と撤退・アッツ島とキスカ島

西川さんはいま、船が通過しているアリューシャン列島のアッツ島とキスカ島が、先の太平洋戦争で正反対の運命をたどった戦争ドラマを語って聞かせました。

太平洋戦争が始まって半年を過ぎた 1942 年 6 月から、アメリカ軍は当時、日本が占領していたアッツ島の奪還のために戦艦、空母などの大部隊で包囲し、1 万人を超える兵力を投下して守備隊わずか 2500 人のアッツ島に上陸してきました。その壮絶な戦いと最後の場面は、筆者も実録伝記を読んで知っていましたが、今回の航海でその島の脇を通過して帰路につくとは思いもしませんでした。

戦力・兵員・装備ともに圧倒的に上回る米軍に激しく抵抗する日本守備隊でした

が、ほどなく守備隊は全滅の悲運をたどり、日本国内ではこれを「玉砕した勇猛な兵士たち」として報じられました。玉砕という戦死者を称える言葉を使った最初の出来事でした。

続いて米軍は、隣にあるキスカ島も海軍部隊で包囲し、殲滅作戦を始めました。キスカ島には 6000 人の守備隊がいたのです。このとき日本の大本営本部は、北方の過酷な自然条件の中で占領を続けていた守備隊を放棄する判断に傾き、アッツ島はいわば「見捨てる」戦略をとり、キスカ島守備隊には撤退するように命令しました。

6000 人の守備隊は、濃霧の中をキスカ島に接近してきた巡洋艦「竹隈」を旗艦とする艦隊に次々と乗り込み、わずか 1 時間足らずの中で全員の撤退に成功して離脱し、この作戦は成功したのです。濃霧と荒れる北海海域で起きた玉砕と撤退。二つの命運を決めたのは当時の戦争指導者であり、大本営の作戦本部でした。正しい判断と素早い決断と実行さえあれば、国の命運をも変えることができることを教えた出来事でした。

北海道出身者多数が犠牲者になった

船がアリューシャン列島を抜けるころ、ランチの食卓で筆者は窓から海を見ながら「晴れていれば、この向こうにアッツ島が見えたかもしれませんね」と独り言のように語りました。するとすぐ右隣りにいたご婦人が「玉砕した島ですよね」と反応したのでびっくりしました。

玉砕という言葉を知っているとは驚きでしたが、いろいろ話をするうちにご婦人は札幌にお住まいの昭和 9 生まれでした。アッツ島で玉砕した戦死者の英霊を北海道神宮（当時は北海道護国神社と呼んでいたそうです）に納めるため、神社に向かう行列がしずしずと進んでいく光景が忘れならないと語りました。北の守りを固めるということから、多くの北海道出身兵士がアッツ島の守備隊にいたということでした。

遅すぎる決断と実行

日本は、いつの時代でも国家として先を見通した正しい戦略とその結論に基づいた決断と実行が出来ないことを 80 年前の大戦の中でも数多く見ることが出来ます。21 世紀になってから、デジタル技術革新が急速度で始まり、IT 産業革命が勃発しました。100 年後に今日を振り返って総括すれば、間違いなく第 3 次産業革命のど真ん中にいたことを認識することが出来るでしょう。

デジタル化した技術が教育・研究、社会、企業、組織、国家を急進展で変えていき、人の考えも価値観も文化も何もかも変えてきました。途上国・先進国に関係なく世界同時進行で進んだことに、前 2 回の産業革命とは大きな違いがありました。日本人、とりわけ国家・行政・企業の指導者たちは、時代認識をしっかりと持ち、先を見通した技術革新を先導する国家を作る責任があるでしょう。同時にそれは、筆者たち国民にも相応の責務を課せられたことにもなるのです。

世界一周の旅で感慨を持った様々な出来事の中でも、西川さんの講話から思い起こした「玉砕と撤退」の史実は、重い課題を背負って帰国する機会になったのでした。

世界一周の旅の報告は、ここで区切りをつけ、次回はこの船旅の総括を書きます。

船のラテン系バンドで人気のある「Joy＆アップスタート」のファイナル演奏を聴きに行ったら、「アッツ島とキスカ島の史実」を講話してくれた西川さんご夫妻とバッタリ。記念写真に収まる栄誉をいただきました。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 59（総括その 1）

2024/07/25

総括その 1　105 日間の船旅の仕組み

PEACE　BOAT105 日間の船旅で 21 寄港地、18 カ国で下船・上陸しました。上陸していた総期間は 23 日間。残り 82 日間は船に乗っていたことになります。寄港地に降りて飛行機で数日間から 9 日間ほどの「オーバーランドツアー」が用意されており、陸に上がって飛行機などで各地を観光し、PEACE　BOAT に戻ってきて合流するというものでした。陸で観光している数日から 9 日の間に、PEACE BOAT の航海は続いており、ツアーはそれを追いかけて、次の寄港地に接岸したところで合流するというものでした。

オーバーランドツアーには、2 つの問題点がありました。第 1 に船を離れてホテルに宿泊をして観光するので数十万円から 100 万円余分の費用がかかりました。これは高いという評判がほとんどでした。2 つめの問題点はツアーに参加している間、陸上のホテル代を負担するので、船の宿泊代と二重の宿泊代がかかることです。当たり前と言えばそうですが、それなら船にのらないで別途、目的を立てて旅行すればその値段より安く行けるのではないか。そういう意見でした。ただし、自分ですべて計画立案して実行するのは大変なので、別途、日本からのツアーに参加する形式がベターという意見でした。

西回りにインド洋からアフリカ喜望峰を回って大西洋に抜けて北上し、アイスランドから北大西洋の向こう側を東に回って北米・ニューヨークへ行きます。それから中南米・南米まで南下してパナマ運河を通過して太平洋に出て北上し、アラスカを経て西下して横浜に寄港するコースです。

つまり船旅というものは、船にいる間の観光はなく、甲板から海を見るか遠く陸の景観を見るだけであり、観光は寄港地で上陸したときの短時間ツアーか、オーバーランドツアーで飛行機などで各地を観光して、数日後に船に合流するというものです。

乗船後、初めてその仕組みを実感として知りました。筆者もオーバーランドツアーの応募開始から 1 ヶ月後に申し込みましたが、そのときにはすでにどのツアーは満杯でした。キャンセル待ちにしておけば、チャンスはあったかもしれませんが、満杯と聞いてすっかり諦めてしまいました。

印象に残った上陸観光のビッグ 3

船内での生活ぶりは、このブログでも何度か報告してきましたが、総括として筆者が最も感じた 3 つの雑観を書いてみます。

第 1 は、ロンドン郊外にあったストーンヘンジ遺跡の見学でした（**ブログではその 31 で報告**）。バスに揺られて 3 時間ほどの距離にあった平原の中にそれはありま

した。子どものころの少年雑誌で読んでいたので、その遺跡には非常に興味がありました。先史時代の人々が、何の目的で遠く離れた場所からこの巨岩を運んできたのだろうか。様々な意味づけがされてきましたが、今なお謎が解けないままになっています。

今回のガイドの説明では、亡くなった人の墓標とか記念碑とかそういうことが最も可能性があるという説が有力になっているようです。遺跡を取り囲んだ大きな円形の見学路を 1 時間ほどかけて一回りしますが、どの地点から見ても遺跡群の景色は違ったものに見えました。

この先、ほぼ永遠にこの謎は解けないままに残されるのでしょうか。ロンドンのホテルに一泊したツアーだったこともあり、印象に残る観光でした。

快晴で日差しの強い日でした。実物の遺跡を見るという長年の夢を果たして大満足のツアーでした。

貧しい国になった日本と日本人

第 2 の雑観はアイスランド観光のときのものです**(ブログではその 36 で報告)。**

日本には多くの外国人観光客が押し寄せています。極東の島国であり世界の中でも経済大国として知られ、数々の独自の歴史と文化を持っている国としても魅力ある観光地です。それだけではなく最近の円安によって「何でも安くて、食べ物も美味しい国」として人気急上昇を外国人観光客から聞いて知りました。

その真逆なことをこの船旅で体験しました。アイスランドの首都、レイキャビクに上陸したときの体験からでした。人口 38 万人、国土面積は北海道より少し広い小さな国です。地熱発電、風力発電でエネルギーは余っているので輸出しています。ところが、お土産屋を覗いてびっくりしました。日本で 300 円程度かなと思う板チョコが 2000 円でした。この国の通貨アイスランド・クローナは、そのまま日本円と同じ価格なので、値段表の数字がそのまま円価格になるのが便利でした。

ご婦人たちは、洒落たショールやセーター、装飾品類の値札をみて、驚いた表情です。「日本で買った方が安いよね」というささやきがあちこちで流れていました。PEACE BOAT の案内パンフレットを見たら、日本でのハンバーガーは 450―550 円ですが、アイスランドでは同じものが 1700 円から 2000 円と書いてありました。

アイスランドは地熱発電（写真）、水力発電でクリーンエネルギー国家として世界トップクラス。海底ケーブルを敷いて電気をイギリスに輸出しています。福祉政策も行き届いた素晴らしい国作りをしていました。

一人あたり GDP は、アメリカとほぼ同じ約 8 万ドル。日本は約 7 万ドルなので抜かれています。年金の平均は、約 70 万円だそうで（現地ガイドの説明）、税金が高いので生活はそれほど楽ではないそうですが、医療費・学費、暖房・給湯費はタダ。福祉厚生が行き届いているので住みよい国であり、福祉国家として、存在感があります。世界の広さを感じました。

熱帯雨林地帯にあったヨーロッパ人の国

地図を見ると北米大陸と南米大陸の間をいくつもの国でくねくねと細く結んでいる、中南米諸国の中の南の方に位置しているコスタリカを訪問しました**（ブログではその 46 で紹介）。**

港から首都サンホセまでのバスに乗り、2 時間以上もかけて市街地のショッピング・センターにつれていかれそこで「放置」されました。現地の案内はナシ。夕方、迎えに来るバスで船に戻るだけ。これで「2 万 6000 円は高いよね」と参加者はブツブツ言いながら、バスを降りました。

雨期に入っているため外は雨。筆者は仕方なくまず、広々としたセンター内を見学してみました。有名な世界のトップブランドの店舗があちこちに点在しています。センター内は、ピッカピカでゴミ一つありません。分別ゴミ用のジュラルミン製のゴミ箱があちこちに設置されています。コーヒーショップに座り込んで Wi-Fi 接続し、PC 操作をしながらこの国の人々の観察をしてみました。

男女とも背が高く整った顔立ち、女性は均整のとれた金髪夫人。世に言う美男美女群です。子どもの団体が来ました。こちらも整った顔立ちで、みなきれいな服装です。おしゃべりしながら時にふざけ合って歩いている光景は、万国共通です。どこかヨーロッパの近代的な都市に来たような錯覚を覚えました。

バスの車窓から見た熱帯雨林の雨期の風景は、首都のサンホセに行くまで、写真のような光景が続きました。いまでも少数の原住民が、この森の中を移動しながら生活しているそうです。高速道路のインフラは、しっかりしたものでした。

コスタリカは軍隊を持たない国とその程度の知識しかありませんでしたので、ネットで外務省の情報などから国情を急きょ調べてみました。するとこんなことが判明しました。

- 人口は 515 万人、面積は日本の九州と四国を合わせた程度。
- 1949 年から現在まで、選挙により政権交代が行われており、中南米で安定した民主主義体制を持つ国。報道の自由度も確保されている。
- 識字率 98%（2018 年 UNESCO）という高い教育水準を持っており、教育費と医療費はタダ。
- 1994 年憲法で軍の非保有を宣言して常備軍を持たず、1983 年に「永世非武装中立」宣言し、87 年にはノーベル平和書を受賞している。

- 国民性が温厚で、物価が割安。交通インフラが発達し温暖な気候で住みやすく、イギリスのシンクタンクの調べで、世界一幸せな国の指標でトップになるなどこの種の世界ランキングでたびたび世界一になっている。

この情報にはびっくりしました。産業は良質なコーヒー、バナナ、パイナップルなどの栽培輸出で地方の雇用を支え、近年は特区に世界のハイテク企業を誘致して世界の医療機器の製造拠点になってきており、日本にもカテーテルなどを輸出しているとあります。ソフトウェア開発や生命科学産業も発展しているとあります。

ぶったまげた本当のコスタリカ方式

何よりも驚いたのは、日本の衆議院選挙で採用されている「コスタリカ方式」のいわれを知ったときです。コスタリカは選挙区内の有権者と議員との癒着を防ぐ目的で、国会議員の同一選挙区での連続再選を禁じており、大統領選挙でも再選を禁じていました。大統領で再選を目指すには退任後 8 年間の空白を置いて再出馬できるとなっていますが、これまで再出馬した大統領候補はいないようです。

日本では衆院選で「コスタリカ方式」というものを採用しています。小選挙区比例代表並立制では、同じ政党または友党に競合する候補者が存在する選挙区では、1 人を小選挙区に、もう 1 人を比例区に単独で立候補させ、選挙ごとにこれら 2 人を交代させる方式をいいます。コスタリカの再選を禁じた選挙制度にあやかって名前だけ勝手に使っているようです。

コスタリカの清廉潔白な政治目標の中で実施しているコスタリカの選挙制度を知り、名前だけちゃっかり拝借し、似ても似つかない選挙制度をしている日本は「恥を知れ」と思いました。

豊かな自然で人気上昇中の国

コスタリカはアメリカ人の好感度ナンバーワンと聞いており、近年、移住者が増えているようです。多彩な植物・鳥類の生息地域として有名でウミガメの世界産卵地

になっています。国土の４分の１を環境保護区に指定しており、映画「ジュラシックパーク」の舞台にもなったということです。

ショッピング・センターのレストランやコーヒーショップをハシゴしながらネットで調べ、人々を観察し、船に帰るバスに乗り込んだときには、すっかりコスタリカファンになっていました。

PEACE BOAT で世界一周の旅ーその 60 で最終回（総括その２止）

2024/07/28

乗船客とスタッフを入れて総勢1500人

これだけの人間を乗せて衣食住すべてまかなう船は、日常的に生活している町が海上を動いていくようなものです。あるいは12階建てのマンションが海上に浮かんで動いていくということでしょうか。

乗ってみて意外感があったのは、車いすの方や歩行が困難な方がかなり目についたことです。手押し車で移動する方も相応にいました。乗って間もなく、風邪がはやりインフルエンザ、コロナ罹患者も出て筆者も気管支炎にかかり1週間ほど船室でゴロゴロしていました。

航海中に緊急ボートやヘリコプターで退船した方もおり、船内で亡くなった方も4人と言われています。平均年齢が73歳とも言われ、最高齢は95歳とか101歳とか言われていました。いずれの数字も食卓などで噂話として語られたことですが、筆者は大体そんなことではないかと信じていました。

船は築30年です。船内の温度コントロールは、うまく作動しているようには思えませんでした。筆者の船室も、寒かったり暑かったりで、エアコンダイアルはまったく不能であり、レストランは総じて寒い環境でした。

毎朝の食事。上が和食、下が洋食。写真の中のすべてを食べるわけではなく、適宜選んだものだけを食べます。

PEACE BOAT に乗船した目的は何ですか？

こういう問いかけが乗船客の間でよく出てくる言葉でした。なぜ、世界一周とうたった 105 日間の長い船旅に乗船したのか。単なる観光目的なのか、はたまたなにか目的があったのか。筆者が自問しても、回答は見つかりませんでした。強いて言えば、自転車操業のように続けてきた仕事一筋の生活、生き方に一つの区切りをつけたいということでしょう。しかし時間的に余裕を持った観光も旅の楽しみ方も、思ったようには出来ませんでした。

なぜか？　それは自分の年齢と関係があることに気が付きました。今年 11 月の誕生日を迎えると 84 歳です。見かけは年齢より若く見られますが、糖尿病を抱えておりその他には特段の病気を持っているわけではないのですが、年相応に発散するエネルギーが低下していることを感じることが多くなりました。つまり馬力がなくなったのです。往時、最も活発に仕事をしていた時代に比べると 3 分の 1 程度の出力エネルギーになっているでしょう。

船の寄港地のツアーでも、楽な方を選んでいたように思います。昔ならツアーなどに参加しないで真っ先に自分勝手に見聞をするために、地図を片手に街に飛び出したと思います。周囲をみていると、リタイアして間もない方が、生き生きと旅を楽しんでいる様子が見えました。そういえば 60 歳から 70 歳までの 10 年間、筆者が最も充実した仕事に明け暮れていた年代でした。

船内活動に精を出す

船内活動では、最も期待して乗り込んだのが社交ダンスでした。これは身体を動かすので、それなりの運動量を確保できると踏んだのですが、これとて上手くはいきませんでした。ダンスは講習会形式が多いので初心者と踊ることが多くなります。しかし、ダンス教師に教えてもらうことだけで過ごしてきたので、いきなり教える立場にはなれません。教え方が分からないのです。

フリーのダンス会が毎日開かれていますが、これに出てくる方は、千差万別なので筆者がペアとなって踊れる方はほとんどいませんでした。そんなこともあって、後半はダンスにも行かなくなり、もっぱら本を読んだり乗船客とお茶をする時間が増えました。

そんな中で自主企画という講演会を 9 回も行ってしまったのです。

＊学校給食は世界一のソフトパワー

＊沖縄返還を巡る密使・密約外交の真実（上下 2 回）

＊沖縄返還と日本の民主主義のあり方（PEACE　BOAT と共催）

＊イベルメクチンがコロナ特効薬になれなかった事情

＊野口英世はノーベル賞をつかみかけていた

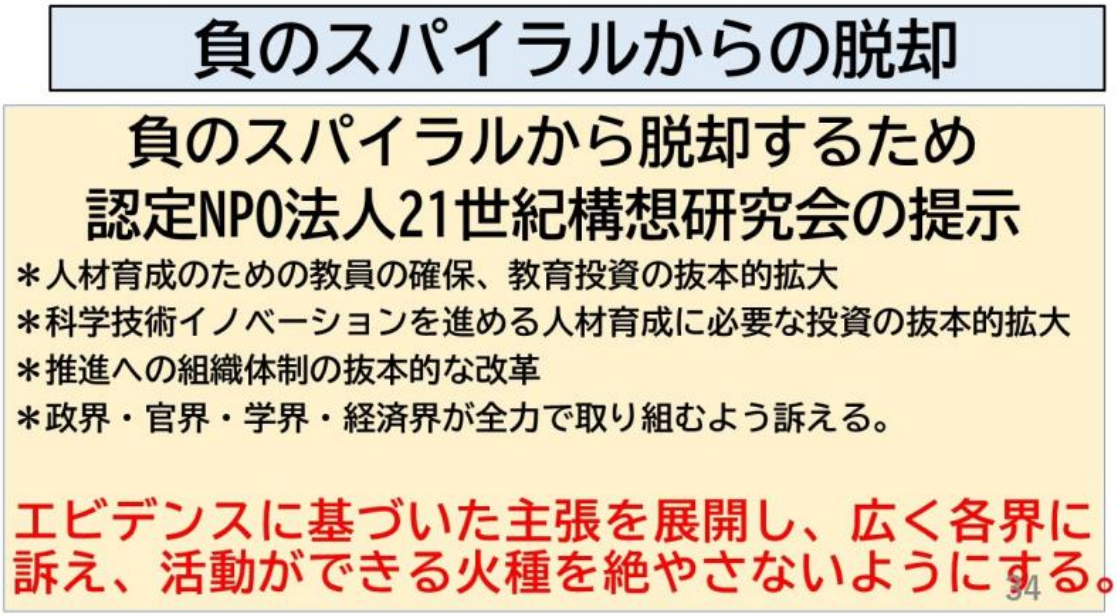
＊新札千円札に登場した北里柴三郎のノーベル賞物語

＊北里の無念を晴らした大村智先生のノーベル賞物語

＊25 年間劣化し続ける国家と組織

沖縄返還の「密使・密約外交と日本の民主主義」の講演については、PEACE BOAT 事務局が支援してきたものです。会場は最初の学校給食の講演だけは、大きなオープンスペースでしたが、その他はすべて船の中で 2 番目に大きなビスタラウンジという劇場型の会場でした。毎回、200 人内外の聴者が来てくれました。

沖縄の日に合わせて、「沖縄返還の密使密約外交と日本の民主主義」について講演しました。多くの方から反響をいただきました。



「国家と組織の劣化」の講演では、筆者の主宰する認定NPO法人21世紀構想研究会の活動に言及し、船を降りてからも日本の劣化の歯止めへ提言活動を続ける覚悟を語りました。

講演後の反響の大きさを筆者の実感として上げると、「劣化する国家と組織」がトップで、「沖縄返還の密使・密約外交」の 3 回の講演が同列で続きました。また野口・北里・大村のノーベル賞がらみの話もそれなりに好評であり、筆者としては満足するものでした。

この講演活動は、PEACE BOAT 乗船体験者からのアドバイスもあり、事前に PEACE BOAT から相談があったので持参した PC には、過去の講演資料やデータ類などを入れてきました。それを基にしたリニューアル・パワーポイントを作成して講演しました。

やり残したオカリナと短編小説

乗船する前に目標があったオカリナ演奏のマスターと、書きかけていた短編小説の完成は出来ませんでした。オカリナは、講習会の集まりがあったので参加しまし

たが、参加者はいずれもそれなりに習熟している人ばかりであり、筆者のような初歩クラスの人はいないのでオカリナは捨てることにしました。ところが何かのきっかけで初級者に教えてくれる先生がいると聞いたので、そこに参加してなんとか「ふるさと」だけはほぼ一人前に吹くことが出来るようになりました。習い事の発表会があり、そこで「初級者のオカリナ演奏」グループ５人の１人として壇上で演奏する機会もいただき、成果らしきことをやり遂げた気持ちでした。

小説執筆の方は、頭の中で展開を考えることはたびたびありましたが、PC に向かって執筆していく気分にはならず、そのまま帰国することになりました。

オカリナ発表会では、壇上に並んで「ふるさと」などを演奏しました。

費用対効果は？

食卓で知らない同士で話をすると、乗船費用の話になることがあります。4人、3人、2人部屋、個室、セミスイート、スイートなどですが、4人部屋1人100万円から

個室は350万円くらい。その上は不明でした。契約の時期によって、大きく違っていました。コロナ前に予約した方と直前に予約した方では「割引」が違っています。総じて早めに申し込めば「早割」で安く済んだようです。

このほか、船内のアルコール飲料などは自己負担ですが、フルコースの洋食、ビュッフェスタイルの食事などは費用ゼロ。上陸して観光するオーバーランドツアーについてはすでに書いたので省きますが、様々な観光コースを用意したオプショナルツアーは、すべて相応の費用がかかりました。

105日間の旅は、乗船内容によって差が出ますが、ざっと 200 万円から500 万円程度でしょうか。これが高いか安いかは、乗船者それぞれの価値判断になりますが、筆者が聞いた方からは、そうじて「楽しかった」「まあ、よかった」というご意見が多く、「もうごめんだ」という方もごく少数いました。筆者は「満足でした」という感想で締めくくります。

これを含めて 60 回の旅の報告を発信しました。多くの方から好意あるコメントをいただき、筆者の励ましになりました。皆さんに感謝の気持ちをお伝えして、PEACE BOAT のブログに幕を引きたいと思います。ありがとうございました。

乗船仲間が筆者の船室に集まってお別れ会をしました。